

**建築部材B群** SX101の東寄りで検出され、建築材4本を組み合わせている構築物である。柱材として使われていたものを切断し、この構築物に転用している。

**SX103** SX101と同一と考えられる後背湿地である。6世紀後半から7世紀前半を中心とした須恵器・土師器が出土している。

### 3. まとめ

調査区の全域において古墳時代後期以前に形成された砂堆（砂丘）と古墳時代後期の遺物を含む後背湿地を確認した。砂堆上には頗るな遺構は確認できず、後背湿地において建築材群を検出したのみである。この建築材群は、砂堆の決壊した部分を補修するための護岸施設であると考えられる。

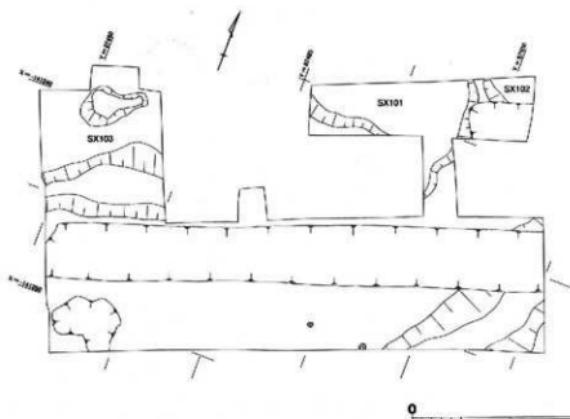


fig.229  
調査区平面図



fig.230 SX101

また今回出土した馬鍔は、下に掘り込まれた土坑の土師器甕より8世紀前半のものであると考えられる。共伴するヒョウタンは祭祀用の容器として埋納された可能性もあり、農耕儀礼の実態を解明するうえで興味深い。

この他にも出土遺物は、多種多様なものがみつかっており、古墳時代の須恵器の环身、瓶、甕、土師器の坏、甕、ミニチュア土器、韓式土器、弥生土器、繩文土器や、漁労具である土縄、飯蛸壺などがある。また瓶・長胴甕・把手付き鍋・竈といった炊飯用のセットもあり鍛冶遺構に伴う櫛の羽口や炉壁材の出土が確認されていることから渡来系の氏族との関連も考えられる。



fig.231  
S X103出土遺物



fig.232  
S X101出土建築材

### 3. 住吉宮町遺跡 第37次調査

#### 1. はじめに

住吉宮町遺跡は、住吉川によって形成された複合扇状地上に立地する遺跡で、住吉川の氾濫により幾度となく土砂の堆積が繰り返され、複雑な土層堆積を呈している。遺跡が立地している標高は20m前後である。当遺跡は、これまで36次にわたる調査によって弥生時代から中・近世に至る複合遺跡であることが判明している。

周辺の調査では、今回調査した北西の隣接地において昭和63年に第11次調査が行われ、弥生時代中期～古墳時代の竪穴住居や平安時代の地鎮遺構を伴う掘立柱建物が確認されている。また、東側の隣接地では、平成5年に第16次調査が実施され、平安時代頃の掘立柱建物1棟、平安時代後期の遺物を含む河道などが確認されている。



#### 2. 調査の概要

調査の結果、3面の遺構面が確認された。

##### 第1遺構面

土坑、溝、不定形遺構、ピット等が検出された。うちSK102は、長さ約110cm、幅約70cmの上坑で、土坑内から中世頃の須恵器片が出土した。また調査区の北東端で検出されたSX101は深さ約25cmを測る甌み状の遺構であるが、搅乱が著しく全体規模については判らないが、埋土の中から中世頃の須恵器片が出土した。

##### 第2遺構面

掘立柱建物、柵あるいは塀列、溝・土坑・ピット等の遺構が検出されている。

##### S B201

S B201は、北側の調査区のほぼ中央で検出した掘立柱建物である。東西方向2間、南北方向2間以上である。柱の間隔は、東西間が1.5m、南北間が2mを測る。柱穴の掘形は、一辺50～70cmの不定円形で、深さは5～30cmである。

##### S A201

S B201の西側で検出したS A201は、建物のそばに付随しているため塀と考えられる。南北方向に並ぶ柱の間隔は1.4～1.6m、柱穴の掘方の平面形は円形で、径約50cm、検出面からの深さは15～20cmである。またS A202は、S B201とS A201と違って方位がやや西

側に振っている。いずれも方形の掘方をもつ。柱穴の掘方は一辺40~50cm、検出面からの深さは20~30cmである。

S D 202 S D 202は、北西から南北方向の溝である。幅20~35cm、深さ10~15cmを測る。溝の断面形状はU字形で、溝内から古墳時代後期の須恵器が少量出土している。そして、S D 202の西側に沿うようにピット列が確認された。各々のピットの規模は、径約30cm、深さ

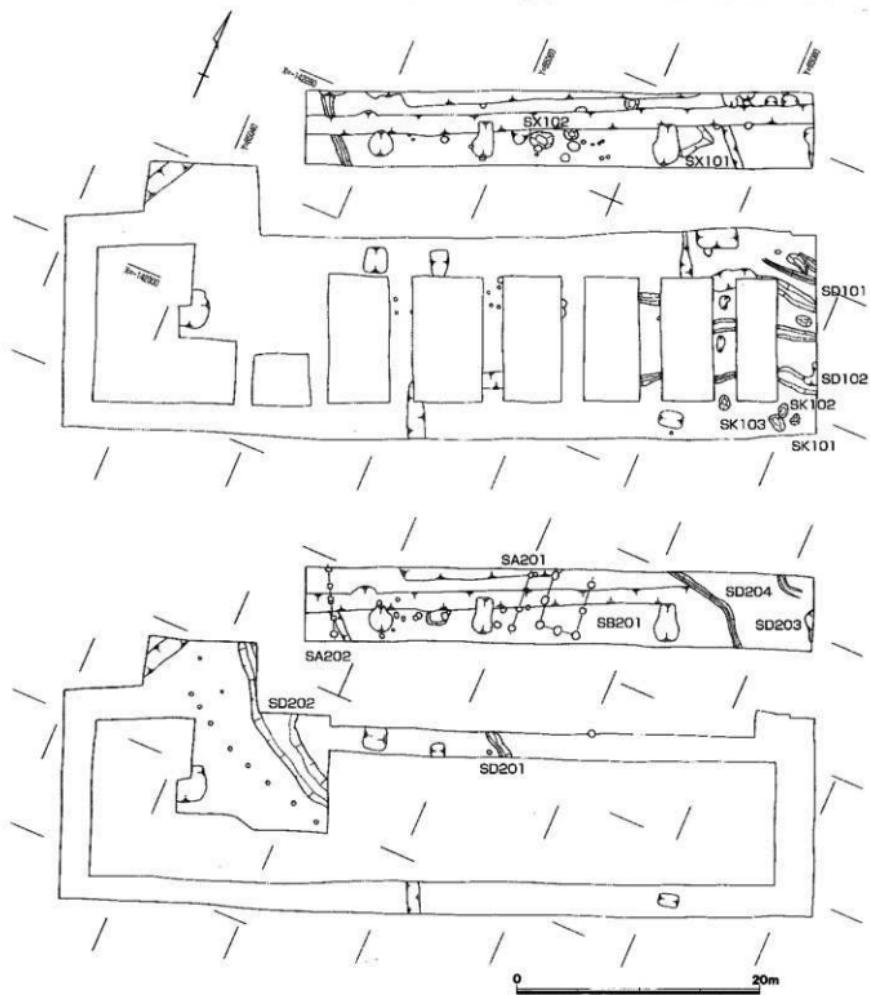


fig.234 第1・2 連構面平面図



fig.235 S B201

15~20cmで遺物は出土していないため時期については判らないが、この溝に沿うように列をなしていることから同時期と考えている。溝からの距離は、1.3~2.5mである。

### 第3遺構面

検出した遺構は不定形の土坑（SK301~304）6基である。

**SK302** SK302は、最大幅2.4m、検出面からの深さ約50cmを測る土坑である。土坑内からは、土師器の細片が少量出土している。

**SK303** SK303は、最大長約250cm、幅約150cm、検出面からの深さ約15cmの浅い窪み状の遺構である。遺構内からは弥生時代後期の土器が少量出土している。

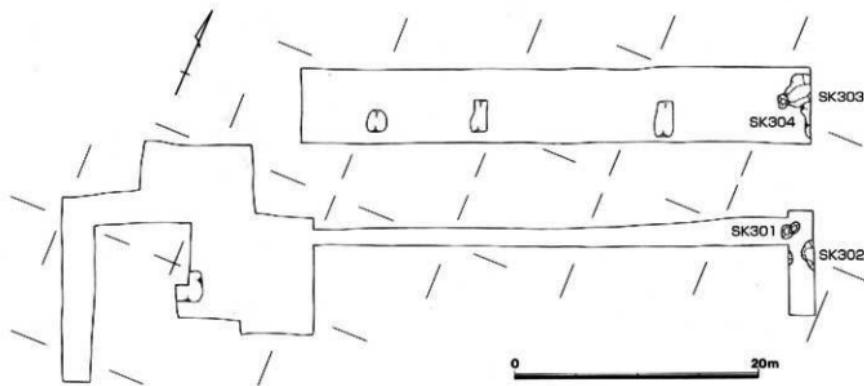


fig.236 第3遺構面平面図

### 3. まとめ

調査の結果、検出された遺構の密度は、北辺域に集中し、南側については希薄であることが判った。第1遺構面では遺構内から明確な時期を決定できる遺物の出土がなく、時期についてははっきりしないが、隣接地の調査内容を参照すると平安時代頃と考えられる。

また第2遺構面で検出した掘立柱建物についても、柱穴内から遺物の出土がなく時期決定にかけるが、第11次調査の第3遺構面で確認された建物群の時期頃かその前後と推察される。ただし、この建物の主軸の方向が第11次調査と第16次調査で確認された建物の主軸と若干異なっており、造営された時期に差があるのかどうか今後検討の余地がある。

第3遺構面は、調査区の東側で遺構がまとまって検出された。これらは、出土している遺物が磨滅して細片が多くいため明確な時期決定に欠けるものの、第11次調査で第5遺構面として報告されている弥生時代後期末から古墳時代前期の範疇にはいる層に相当する遺構面と考えられる。

以上のことから、居住域は北側に存在するよう、南側については、遺物は出土するものの遺構は希薄である。下層に見られる土壤化した土は水田土壤の可能性があり、過去の調査においてもその存在が指摘され検出を試みているが発見には至っていない。今回も土層断面観察により畦畔等の存在を確認したが、発見できなかった。

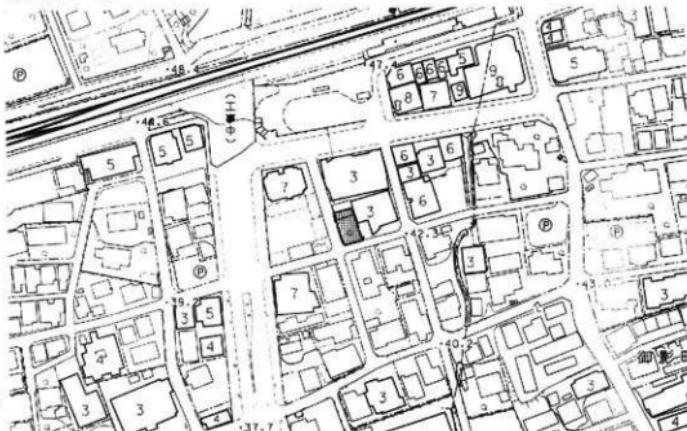


fig.237 調査区遠景

## 4. 郡家遺跡 第72次調査

### 1. はじめに

郡家遺跡は、住吉川、芦屋川、天神川等に形成された扇状地に存在している。弥生後期から中世、江戸時代にまでいたる複合遺跡である。今回調査の実施された城の前地区でも多くの調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代前期、中世の集落が存在することも確認されている。



- 2本柱となる。他にも2ヶ所で柱穴が確認されている。周壁溝は確認されなかった。
- S D01 幅約30cm、深さ約10cmを測り、南北方向へ延びる小溝である。遺物は出土していない。
- S D02 幅約30cm、深さ約15cmを測り、南北方向へ延びる小溝である。古墳時代後期の須恵器や土師器が、細片で出土している。
- S K02 幅約40cm、深さ約35cmを測る、不整円形の土坑である。暗褐色砂質土が体積しており、古墳時代後期の須恵器や土師器が細片で出土している。
- S K03 幅約50cm、深さ約54cmを測り、灰褐色砂質土が堆積する土坑である。古墳時代後期の土師器と考えられる細片が出土している。
- S K04 幅約70cm、深さ約40cmを測り、暗褐色砂質土が体積する土坑である。古墳時代後期の土師器と考えられる細片が出土している。

### 3.まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の集落に伴う遺構と、中世後期～近世の採石遺構が確認されている。採石遺構では、最も古い遺構で15世紀頃の遺物を出土するものがあり、調査地の周囲では当該時期に花崗岩の採石が始まったと考えられる。江戸時代の遺物が出土する採石遺構も確認されている。15世紀を前後する時期から採石が始まり、江戸時代に引き続き採石が行われていた事が理解できる。採石遺構のなかに残された花崗岩には、鑿を使用した痕跡の残る礫も存在している。

また古墳時代後期の遺構では、竪穴住居が確認できたことがあげられる。城の前地区の中でも、調査地の周囲は古墳時代後期の遺構があり発見されていない地域であった。今回の調査結果から、周囲にも古墳時代後期の集落が拡がる事が明らかとなった。



fig.239 S B01周辺

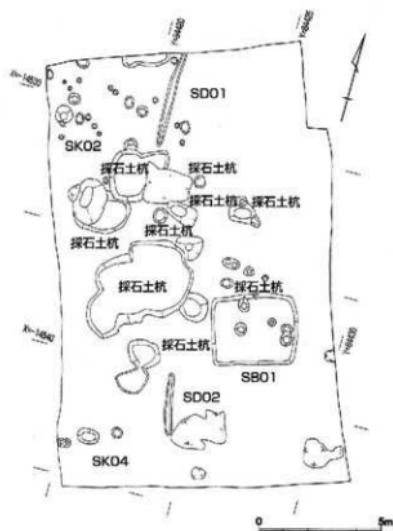


fig.240 調査区平面図

## 5. 西岡本遺跡 第5次調査

### 1. はじめに

西岡本遺跡は、住吉川中流域の左岸に位置し、河岸段丘～扇状地上に位置する遺跡である。一帯は、古墳時代後期の群集墳が存在することが知られているほか、現在までの調査で縄文時代早期および弥生後期～古墳時代初頭、古墳時代中期の集落や5世紀代の古墳などが確認されている。

また、今回の調査地に隣接する本山淨水場構内において実施された第4次調査においては、平安時代の多数の柱穴と洲浜を設ける立派な苑池が確認されており、当時の貴族の庭園を伴う別荘の存在が想定されている。



S K01 調査区の東端付近で南約半分を検出した不整円形の土坑である。径約110cm、深さ約13cmを測る。

S K02 調査区の東端付近で検出した。径約60cm×80cmで深さ約18cmを測る不整形の土坑である。

S K03 調査区の東端付近で検出した不整形の土坑である。径約70cm×50cmで深さ約18cmを測る。

### 3.まとめ

調査の結果、基本的に第4次調査に近接した地域から、平安時代の柱穴等の遺構が検出されている。園地に伴う建物がさらに西側に広がることが確認された。ただ調査範囲の狭いこともあり、柱穴がどのような建物を構成するかについては不明である。また遺物包含層は調査区全体に存在するが、遺物の出土は少ない。

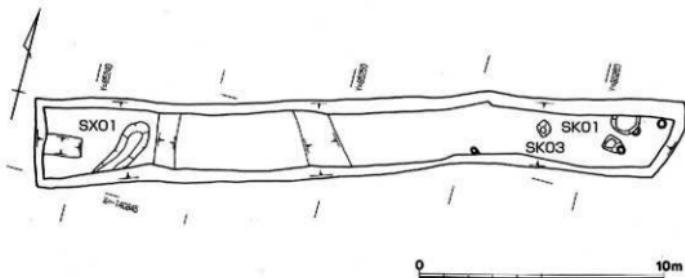


fig.242  
調査区平面図



fig.243 調査区西半部全景



fig.244 調査区東半部全景

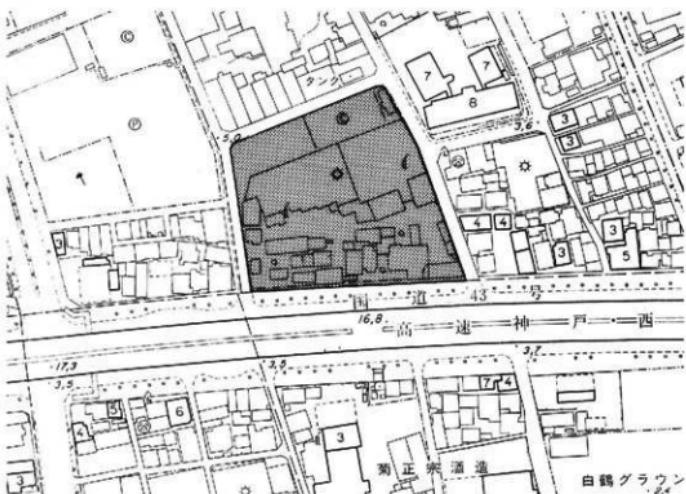
## 6. 御影郷古酒蔵群 第1次調査

### 1. はじめに

江戸時代中期以降、都市酒造業で栄えた伊丹・池田などの酒造地にかわって台頭してきた西摂沿岸部の「灘目」と呼ばれていた地方は、東は武庫川河口から西は旧生田川の近傍にいたる沿岸の東西約24kmにわたる地域であり、魚崎・御影・大石の三郷に下灘と今津郷を加えて江戸時代の灘五郷とよばれている。

今回の発掘調査は平成9年度以降、魚崎郷古酒蔵群・御影郷古酒蔵群・西郷古酒蔵群の酒蔵の調査が開始され6例目、御影郷古酒蔵群では初例となる。調査地の東側には住吉川、西側には石屋川があり、標高約3.5mの扇状地末端上に位置している。なお、明治頃の海岸線までは約350m程である。

弘化三年（1846）の建物配置図によると、今回の調査地の北側に「内蔵」、南側に「居宅」があったことがわかる。



### 2. 調査の概要

調査は、酒蔵の存在が記録上確認できる部分（第1・2調査区）とこれに隣接する部分（1～3区）について実施した。

#### 第1調査区

##### 溝1

暗灰色シルト混じり砂の整地土の面で、溝、礎石建物等を検出した。  
調査区の北端で最大幅約50cm、深さ約20cmの東西方向の溝を検出した。溝の北側は、花崗岩の自然石を2段にして積み上げているが、溝の南側には石材は使用されていなかった。ただし、杭が等間隔で残存していたことから、溝の南側は石材の代わりに杭を打ち、立板をしていったことが考えられるが痕跡は確認できなかった。

##### 溝2

溝1の南側で検出された溝2は、幅70～80cm、深さ約15cmを測り、溝の埋土である暗灰黑色土から明治時代以降と考えられる茶碗の破片が出土した。

**礎石建物** 1間×1間以上の規模の建物で、東西間2m、南北間3mを測る。検出面から根石までの深さは比較的浅く、根石に丸い自然石を据えられ、掘方には黄褐色砂が詰まっていた。

出土物がないため時期は判らないが、層位の状況からして江戸時代末以降と考えられる。

**建物1** 2間以上×3間の規模の建物で、東西間1.1～1.2m、南北間1.3～1.4mを測る。柱穴の埋上である暗灰黒色土から出土物がないため時期は判らないが、溝2の埋土と類似している。

**鋤溝** 南北方向に溝が6条検出されているが、これらの溝は礎石建物の柱穴によって切られている。これらの溝は建物以前に掘られたもので、畑作に伴う鋤溝と考えられる。この鋤溝からは、江戸時代頃の染付けの破片が含まれていた。

#### 第2調査区

**石組溝** 調査区の北端で最大幅約1m、深さ約25cmの東西方向の溝を検出した。この溝の南側は、自然石を1段あるいは2段にして積み上げた状態で検出したが、本来は2段積み石組溝であったと考えられる。北側の石組みについては大半が調査区外であるが、石組みの一部を調査区の北西隅で検出している。石組みの掘形には江戸時代末頃の染付、瓦等が含まれていた。溝の中からは、陶磁器、ガラス瓶、瓦等が出土している。この石組溝は、江戸時代末頃には存在し、明治時代頃までは機能していたと考えられる。

**埋桶** 石組溝の南西側で埋められた桶が2基確認された。これらの桶は石組溝の掘形を切って埋められている。埋桶1は幅約150cm、深さ約70cmを測り、埋桶2は幅約120cm、深さ約60cmを測る。この桶の用途については判らないが、両方とも廃棄後には陶磁器・レンガ・瓦・

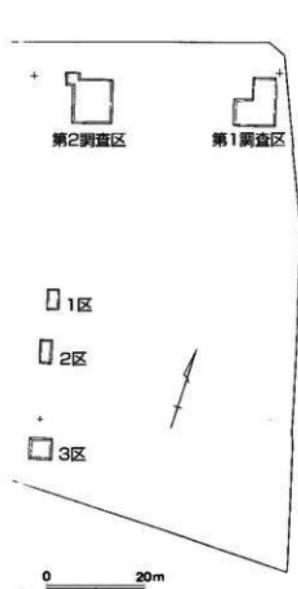


fig.246 調査区設定図

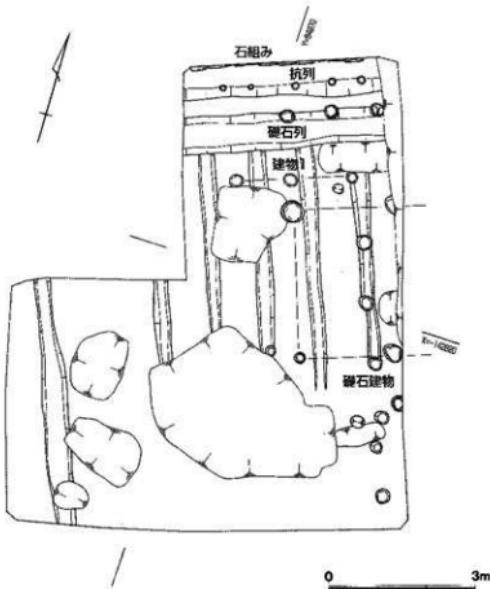


fig.247 第1調査区平面図

鉄屑等が投棄されている。埋桶1と埋桶2の出土物は明治時代以降のものと考えられるが、いつの時期まで使用されていたのかは判らない。

**鉢溝** 第1調査区と同様に東西・南北方向に溝が検出された。これらの溝も畑作に伴う鉢溝と考えられる。

**下層** この検出面の下層を断ち割った際、暗灰色系砂と黄褐色粗砂が堆積していてこの中から近世の染付が若干出土した。おそらく、これらの堆積土は、土地の有効利用のため他の場所から土を運んで来て整地を行い、畑作に利用したものと思われる。

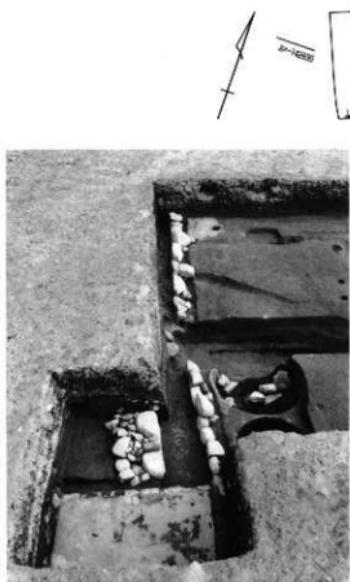


fig.248 石組み溝

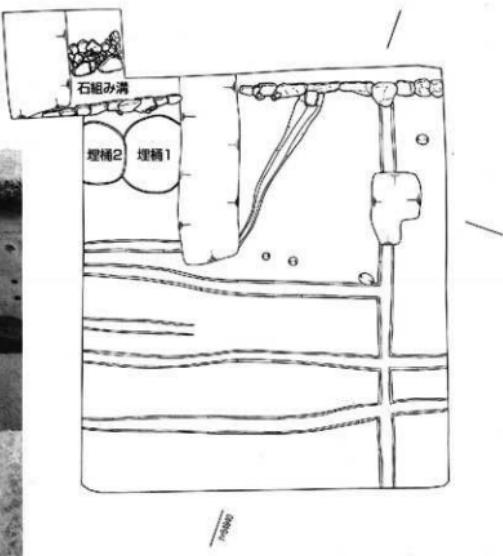
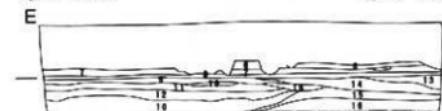


fig.249 第2調査区平面図



第1調査区

- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| 1. 現代土・塊乱             | 11. 暗灰黄色シルト混じり砂   |
| 2. 塗土(神戸大空襲?)         | 12. 暗灰色砂          |
| 3. 黄色細砂(阪神大震災?)       | 13. 茶褐色砂          |
| 4. 黒灰色土(近代整地層)        | 14. 灰黃褐色砂         |
| 5. 暗黒色砂混じり土(近代整地層)    | 15. 灰色砂(近世磁器含む)   |
| 6. 暗黒色シルト混じり土(近代整地層)  | 16. 暗灰色砂          |
| 7. 暗灰紫色シルト混じり砂(近世整地層) | 17. 暗灰色シルト混じり砂    |
| 8. 淡茶色細砂              | 18. 茶色シルト(近世磁器含む) |
| 9. 淡灰色シルト混じり砂         | 19. 黄褐色砂~粗砂       |
| 10. 黄褐色粗砂             |                   |



第2調査区

fig.250 第1・2調査区断面図

- 1区 2.3×4 mの調査区である。東壁際で2段積みの石列を検出した。下段の石列は、花崗岩の自然石を加工したようである。上段の石材は2石しか残っていない、間知石を積み直し下段の石材との境にコンクリートを巻いているため、比較的新しいものと思われる。下段の石積みの掘形からは江戸時代末期と思われる染付等が出土した。なお、ピット・土坑については後世のものと思われ、一部のピットの中にはガラスなどが入っているものもある。
- 2区 1区の南側で2.3×4.7mの調査区である。酒蔵の存在した床面を追究したが、搅乱されていて床面の存在は確認できなかった。なお、石の集積が確認されたが、搅乱の際の投棄・混入と判った。
- 3区 一番南側で4.5×4.3mの調査区である。かなり深くまで搅乱されていて酒蔵の存在した床面は存在しなかった。なお、下層確認の断削りの際、整地層と思われる砂から近世の染付が出土している。

### 3.まとめ

今回の調査では、酒蔵に直接関連する遺構は確認できなかった。ただし、第1・2調査区の北端で石組溝を確認した。規模・方向から同一の溝の可能性が極めて高いと思われる。調査区を弘化三年の建物配置図に照らし合わせてみると、内蔵の北側に位置することが判り、この溝が江戸時代末頃には敷地を区画する役割を果たしていた可能性が考えられる。

また第1調査区で検出した礎石建物は、全体規模が判明しないためどのような構造であったか判らないが、小規模な建物を想起される。ただし、出土物がないためいつ頃に存在していたかは今回の調査では判らなかった。

隣接する部分に設定した1~3区の調査区については、ともに搅乱され、面の残りがよくなかった。ただ1区で検出した。石積みの下段のほうは古いものと考えてよいが、2段目から上部は欠損したため、新しく間知石を積み直している。この構築物は酒蔵に関係する遺構の可能性はあるものの破損が激しく、調査範囲もが限定されているため解明できなかった。

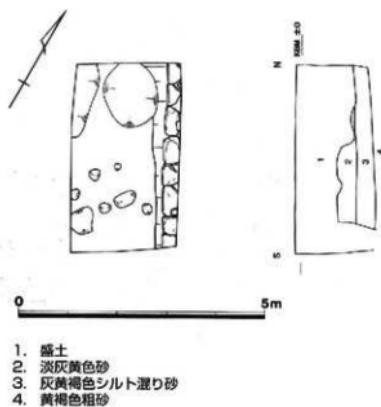


fig.251 I区平面図・断面図



fig.252 I区全景

## 7. 二宮遺跡 第2次調査

### 1. はじめに

二宮遺跡は六甲山南麓のふもとに位置し、その地形は北から南に下る傾斜地となっている。平成10年に共同住宅の建設に伴い実施された第1次調査の結果、飛鳥時代の鍛冶遺構などが発見された。



fig.253  
調査位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

#### 第1遺構面

調査の結果、7世紀と13~14世紀の2面の遺構面が確認された。

#### 河川跡

現代の盛土直下において確認された13~14世紀にかけての遺構面である。河川跡1条とピット等を検出した。

#### 第2遺構面

河川によって削り残された岸にあたる部分の下層において検出された7世紀の遺構面で溝1条とピット群を検出した。

#### S D 201

調査地の長辺とほぼ平行する角度で南北に流れる深さ約40cmの人工の溝状施設で用水路と考えられる。西側約2mの幅が確認されているが上層の河川によって削平を受けていたため全幅については不明である。7世紀前半の遺物が投棄された状態で確認された。

#### ピット群

調査地の北端においてピット群が検出された。直径40cm前後で深さ40~60cmのものが多い。出土遺物が少量で明確な時期は不明である。

### 3.まとめ

今回の調査の結果、飛鳥時代の遺構面が確認され第1次調査で発見された同時期の集落がさらに南へ広がっていることが確認された。

また、第1遺構面で検出された河川跡に含まれていた多量の遺物から調査地の北西側の近くに13~14世紀の集落が存在した可能性がある。

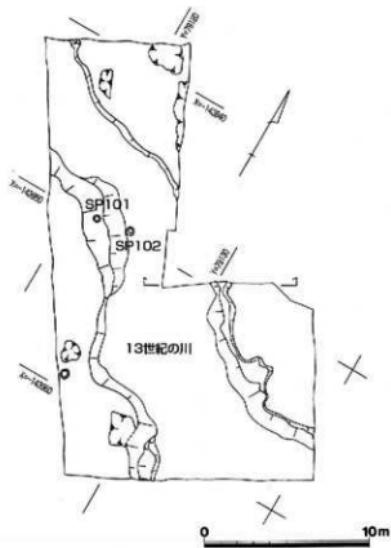


fig.254 第1造構面平面図



fig.255 第1造構面全景

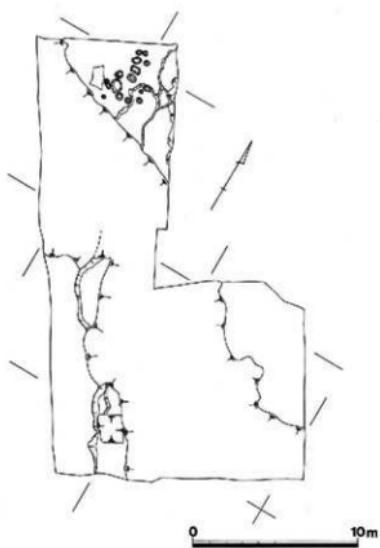


fig.256 第2造構面平面図



fig.257 第2造構面全景

## 8. 雲井遺跡 第16-1・2次調査

### 1. はじめに

雲井遺跡は、中央区雲井通、旭通、琴緒町に所在する縄文時代から弥生時代の遺跡である。昭和62年度に実施した第1次調査では、弥生時代中期の方形周溝墓群を検出したほか、縄文時代についても早期～晚期の土器が出土している。また、今回の調査地の西側隣接地において平成3年度に実施した第4次調査では、縄文時代早期～弥生時代前期の計4面の遺構面を確認している。特に、縄文時代早期については集石遺構などの遺構を検出し、早期前半の大川式・神宮寺式と呼ばれる押型文土器が出土するなど、当該時期の生活の様子を窺い知ることができる貴重な成果を得ている。

今回の調査地については、ビル建設に伴い試掘調査を実施し弥生時代前期の遺構・遺物を確認したほか、本調査に先立ち確認調査としてさらに下層の状況について調査を実施している。



fig.258  
調査地位図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

溝3条、掘立柱建物1棟、土坑1基、柱穴約20基などの遺構を検出した。

#### S B01

2区で検出した平安時代後期頃の掘立柱建物で、調査区内では3間×4間の規模であるが、攪乱のため検出できなかった柱穴もある。この建物が北・西側に延びる可能性は低いと考えられる。南側には延びる可能性もある。柱間はいずれも心々間で、東西方向が1.8～2.2m、南北方向は2.1～2.4mである。

P 3・6は他の柱穴より深く掘られており、35cm程度の深さを測る。P 3からは平安時代後期の須恵器碗が投棄された状態で出土している。

#### S D01

1区で検出した幅45～65cm、深さ15～30cmを測り東西方向に流れる溝である。1区中央部で途切れているが本来は1条の溝であろう。東側の溝から古墳時代後期の須恵器壺が出土しており、当該時期の遺構と考えられる。



fig.259  
調査区北部全景

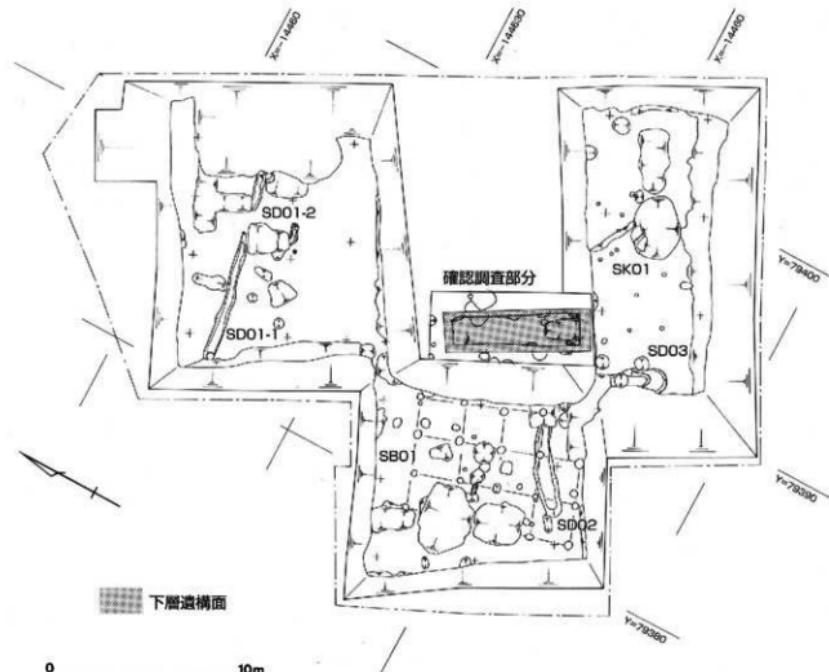


fig.260 調査区平面図

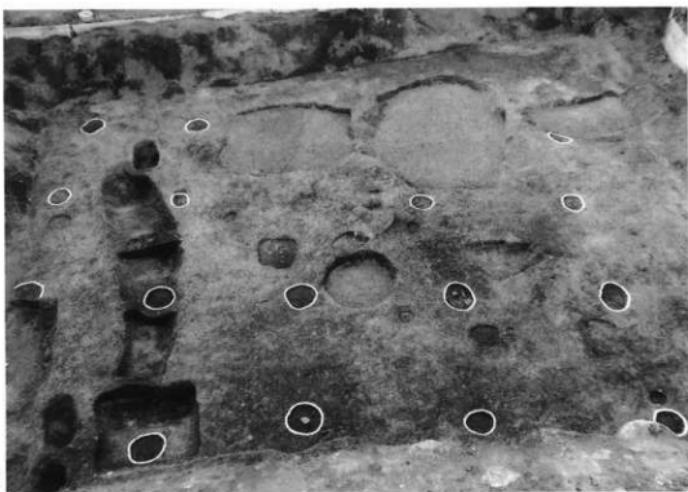


fig.261 S B01

fig.262  
S D02・03

**S D02・03** 2区南部で検出したS D02と、3区西部で検出したS D03はほぼ同規模である。搅乱の影響をかなり受けているため判然としない点もあるが、両者の溝の形状・位置的な関係などから判断すれば、1基の方形周溝墓の一部であろうと考えられる。溝内部からは弥生時代中期（II様式）の土器が出土している。特にS D03の北部では当該時期の甕が出土しており、供献土器と考えられる。

**S K01** 3区中央で検出した土坑であるが、搅乱に切られており本来の形状や規模は不明である。残存部分の規模は、幅0.66m、長さ0.85mで、深さは約35cmを測る。弥生時代前期（I様

式) の壺1個体が出土している。この壺の底部は穿孔されており、瓶として使用されていたものと考えられる。

### 3. まとめ

以上のように、今回の調査では、弥生時代前期・同中期・古墳時代中期・平安時代後期の各時期の遺構・遺物を検出した。全て同一面で確認しており、各時期とも相当の削平を受けているものと考えられる。

弥生時代前期の土坑であるSK01からは、ほぼ完形に復元できる壺が出土している。周辺地での調査成果をみても当該時期の遺構から出土する土器の遺存状態はあまり良くなく、今回は貴重な資料を得たといえよう。

弥生時代中期の溝であるSD02・03については、前述のように方形周溝墓の一部と考えられる。主体部については、位置的な関係から、調査区内の擾乱内で調査区外に存在するものと考えられる。前者ならば既に失われており、後者ならば遺存している可能性があるが、現段階では当然のことながら不明である。当遺跡内における周溝墓の検出例としては、平成8年度に実施した第8次調査において弥生時代前期のものを3基、また昭和62年度に実施した第1次調査では弥生時代中期後半のものを6基確認している。今回の検出例はこの両者の中間の時期のものであり、今回の調査地周辺は比較的長い期間、あまり間断なく墓域として利用されていたものと考えられる。

平安時代後期頃の掘立柱建物を検出したことも大きな成果である。西側隣接地で実施した第4次調査など周辺地で既存の調査では、当該時期の遺構・遺物はほとんど確認されていない。今回の調査成果により当該時期の集落域が存在したことが明かになったといえる。

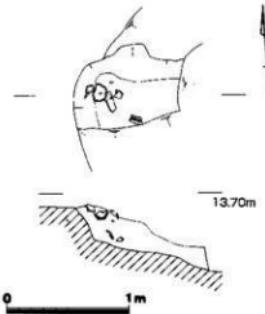


fig.263 SK01平面図・断面図

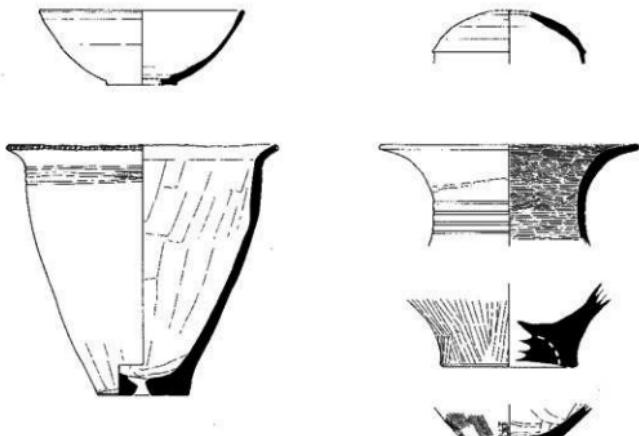


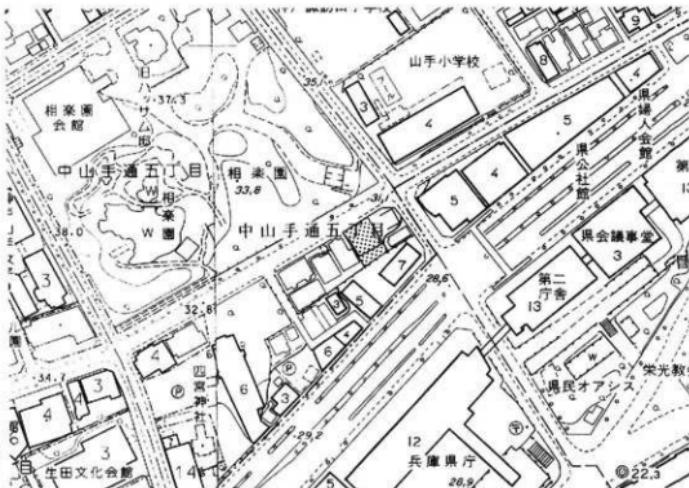
fig.264  
出土遺物実測図

## 9. 中山手西遺跡 第2次調査

### 1. はじめに

中山手西遺跡は六甲山の南麓、標高約31mに位置する平安時代から中世にかけての遺跡である。周辺には東に中山手遺跡、南に花隈城跡が周知されている。また、中宮古墳等の古墳も確認されている。第1次調査においては13世紀代の柱穴と、それ以前と考えられる水田が検出されている。

fig.265  
調査位置図  
1:2,500



### 2. 調査の概要

調査地は北から南に傾斜しており、西から東へも傾斜している。南約半分と北半の一部は後世の造成によって遺構面が削平されていたため、包含層が残存していたのは調査面積の四分の一程度にとどまる。

#### 基本層序

上層より盛土・擾乱層・淡灰色砂質土（耕土）、赤褐色砂質土（床土）、褐灰色砂質土（包含層）、黄褐色砂質土（遺構面）となっている。包含層からは古墳時代後期の須恵器・土師器、中世の土師器が出土している。また碧玉の破片が1点出土している。穿孔の痕跡がある。

#### S B01

東西1間×南北2間の掘立柱建物で、柱間は東西2.5~2.9m、南北1.1~1.2mを測る。

削平されているが、柱穴は直径0.34~0.4m、深さは0.3m程度を測る。遺物はほとんど出土していないが、柱間と柱穴の大きさから、古墳時代の建物と考えられる。

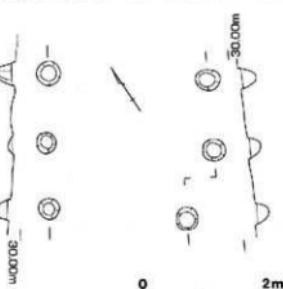


fig.266 S B01平面図・断面図

### 3. まとめ

今回の調査は、今まであまり調査例のない遺跡での調査であり、第1次調査で見られた様に中世の遺構が中心に検出されると予想された。しかし、出土遺物の多くは古墳時代後期のものであった。S B01は古墳時代と考えられるが、ほとんどの遺構は遺物が出土していないため、明確な時期は確定できていない。

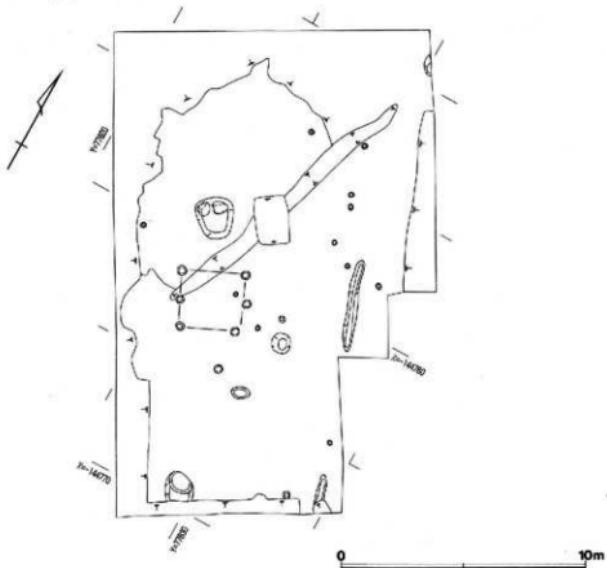


fig.267  
調査区平面図



fig.268  
調査区全景

## 10. 兵庫津遺跡 第26次調査（整理）

1. はじめに 兵庫津遺跡第26次調査は、平成13年度に、実施され『元禄兵庫津絵図』〔元禄9年（1696）〕に描かれたままに、近世の真光寺境内を巡る溝、道、水路や町屋等が検出された。

2. 調査の概要 本年度は、近世の真光寺を巡っていた溝（濠状遺構）内より出土した木製品や金属製品について遺物整理作業を実施した。

整理作業において特記すべきは、溝（濠状遺構）埋土より一括で出土した銭貨（天保通寶）である。天保通寶は計8枚が出土しているが、いずれも周囲や穴部などに鋳造時のバリが残されたままであった。

この天保通寶について、各製造地との比較データ取得を目的とし、非破壊による成分分析を実施した。（なお、分析にあたっては、

（独）奈良文化財研究所保存修復科学研究室長 肥塚隆保氏、同研究室 降幡順子氏のご協力を得、同施設の分析機器を使用させていただいた。）装置は堀場社製のX線分析顕微鏡（XGT-2000W）である。測定条件は、マスク径 $100\text{ }\mu\text{m}$ 、出力 $50\text{kVp}/1.0\text{mA}$ 、測定時間300秒でおこなった。また半定量解析はCu（銅）・Sn（錫）・Pb（鉛）・As（砒素）の4元素について、重量比の算出を標準サンプルは使用せずにおこなった。

非破壊のため、腐食層の分析となった。顕

微鏡観察により、①暗赤色②暗橙色③淡緑褐色④明橙色のサビに分類した。ただしこれは比較的マクロな分類であり、さらに細かく見ればもっと多様な化合物が析出している。なお鋳造品は元素の偏在が想定されるため、測定箇所を郭座部分と決めておこなった。結果は以下のとおりである。

- R005-1（暗赤色部分） • • Cu (85.952) Sn (1.139) Pb (10.398) As (0.281)
- R005-2（暗橙色部分） • • Cu (82.104) Sn (2.777) Pb (15.338) As (0.943)
- R005-3（淡緑褐色部分） • • Cu (71.381) Sn (8.254) Pb (17.923) As (1.373)
- R005-4（明橙色部分） • • Cu (87.719) Sn (3.798) Pb (7.918) As (0.872)
- R005-5（暗赤色部分） • • Cu (87.680) Sn (2.314) Pb (7.357) As (0.290)
- R005-6-1（明橙色部分） • • Cu (85.497) Sn (2.403) Pb (5.495) As (0.273)
- R005-6-2（金属部分） • • Cu (82.321) Sn (5.100) Pb (13.581) As (0.417)
- R005-7（暗赤色部分） • • Cu (89.386) Sn (1.024) Pb (7.240) As (0.272)
- R005-7-2（金属部分） • • Cu (86.464) Sn (2.905) Pb (14.328) As (0.284)
- R005-8（暗赤色部分） • • Cu (82.282) Sn (4.465) Pb (8.155) As (0.662)

3. まとめ 上記の結果から、以下のように考察される。



fig.269 出土銭貨（天保通寶）（細部）



fig.270 出土錢貨〔表〕(天保通寶)

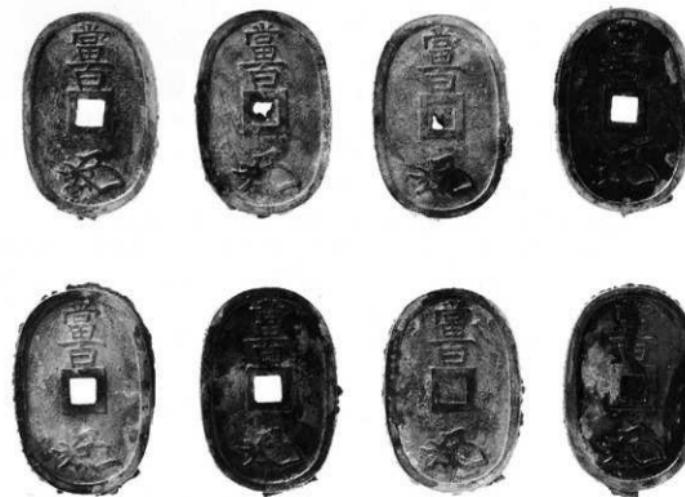


fig.271 出土錢貨〔裏〕(天保通寶)

最も含有量の多い素材はCuであり、重量%も通常の青銅（70～80%）に対して高く、銅合金としては良質なものといえる。Pbの重量比が約5.5～18%と高く、Snの値の低いもので、「鉛青銅」と呼ばれる合金に近いものと考えられる。鉛青銅は切削が比較的容易であり、鋳造後のバリ落としや表面の加工に適したものといえる。

分析箇所が各個体について1～2箇所と少ないと腐食層の分析であることから、母材を完全に捉え得たとは言えないものの、傾向としてはまとまったものが得られたと考える。今後粉体資料など微量サンプルを採取しての分析をおこなうとともに、产地のはっきりした資料との比較から当資料の実態を明らかにしたい。

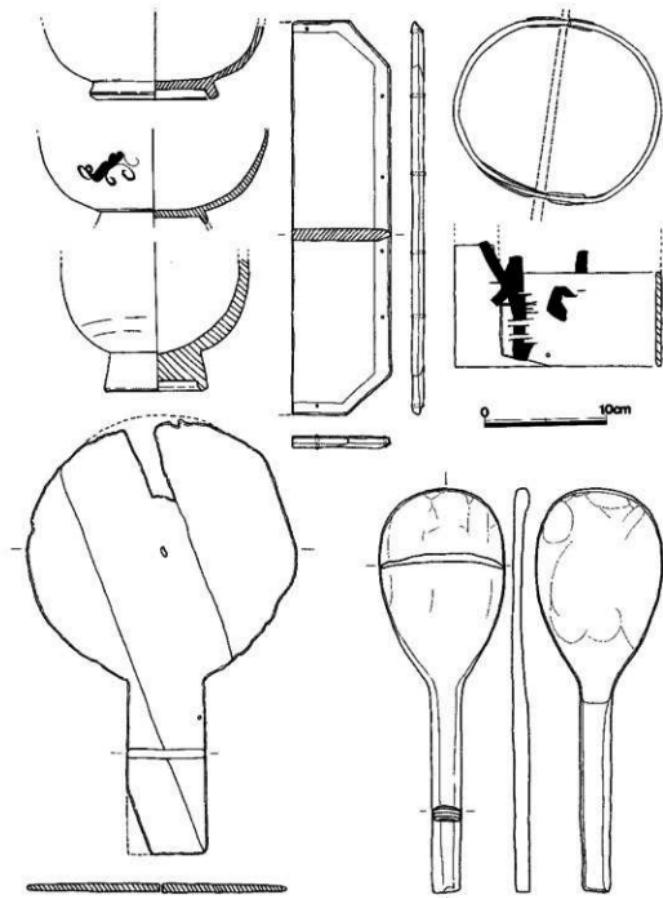


fig.272  
出土遺物（1）

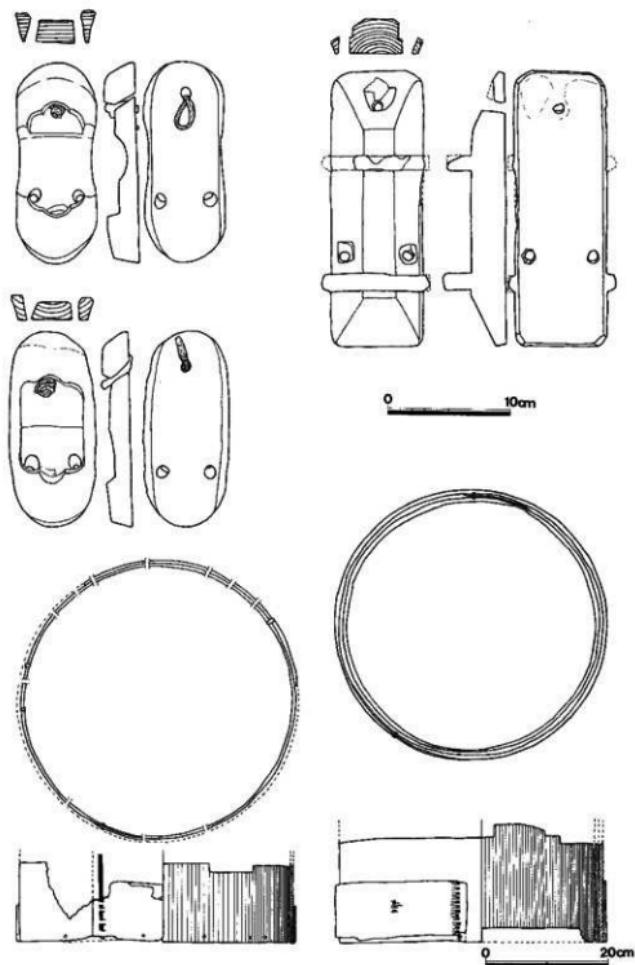


fig.273  
出土遺物（2）

## 11. 日下部遺跡

### 1. はじめに

日下部遺跡は、八多川が蛇行して有野川と合流する地点の南西側に位置し、有野川左岸の平地から丘陵裾部にかけて立地している。

今回の調査対象地は、神戸電鉄道場南口駅のすぐ北側に位置している。周辺では八多地区土地区画整理事業に伴う発掘調査が実施されている。

調査区は、マンション本体部分（I区-約235m<sup>2</sup>）と擁壁部分（II区-約65m<sup>2</sup>）の2ヶ所に分かれている。なお、当調査地の現標高は約168mである。



### 2. 調査の概要

**基本層序** 基本層序は、I区でみると、上層から、盛土及び擾乱、旧耕土、黄褐色細砂となっており、現地表下約55cmで遺構面基盤層である淡黃灰色細砂を検出した。明確な遺物包含層は遺存していない。

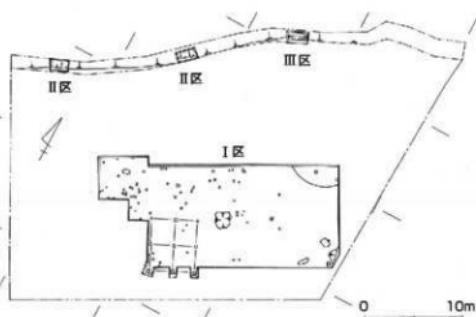
**I 区** I区では、弥生時代後期～末頃の竪穴住居1棟、平安時代後半の掘立柱建物1棟、中世のピット約50基を検出した。

**S B01** 調査区北東隅で検出した。

大半が調査区外に延びるため全容については不明な点が多い。

内部で主柱穴と考えられるピットを1基検出した。

調査区内で検出できた状況から判断すれば、平面形は円形（推定外径約7.6m）を呈し、主柱穴は4本柱と推定される。深さは約40cm



を測る。壁際には調査区内では周壁溝が全周している。また、調査区内においては、ベッド状遺構は検出されなかった。中央土坑についても、位置的な関係から、調査区外に存在するものと考えられる。

南壁際や床面付近で炭化材や焼上が少量ではあるが検出されたことから、焼失住居と考えられる。

出土した土器から、弥生時代後期～末頃の竪穴住居と考えられる。

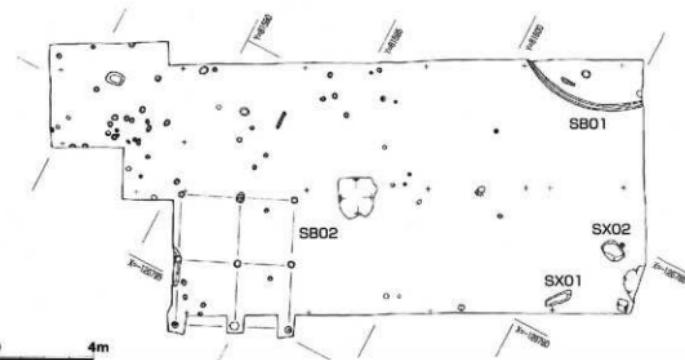


fig.276 I 区平面図



fig.277 調査区全景

**S B02** 調査区南西隅で検出した。一部調査区を拡張して調査を実施し、現状では $2 \times 2$ 間の総柱の掘立柱建物である。北・東側においてこの建物に伴う柱穴は検出してないため、この方向にこの建物が延びる可能性はない。また西側については、P1の西側に延びる柱穴を調査区内では検出してないが、柱間がP1・P2間よりも若干広ければ調査区外に存在する可能性は否定できない。以上から、南側にさらに建物が延びる可能性が考えられるほか、西方向にも延びる可能性が若干考えられる。

P6からは須恵器椀、土師器皿・甕、瓦器椀が、またP9からは須恵器椀の完形品がそれぞれ投棄された状態で検出している。これらの出土土器から、この建物は平安時代後半（12世紀前半頃）のものと考えられる。

**S X01・02** 調査区南東部で、拳大～人頭大の礫を多く含む土坑2基を検出した。このうち、S X01は $1.2 \times 0.37$ mの長方形を呈し、土師器片が出土している。出土土器からは詳細な時期を示すのは困難であるが、周辺の造構の状況から中世の可能性が考えられる。造構の性格については、墓の可能性が考えられるが、現段階では断定できない。S X02は $0.92 \times 0.72$ mの長方形を呈するが、遺物が出土していないため詳細は不明である。

**ピット** そのほか、主に調査区の西半分においてピットを約50基検出しているが、建物として復元できるものではなく、時期についても明確ではない。

**II 区** II区は前述のように約65mが調査対象であったが、調査区の現況は、以前畑として使用していた部分の北端に位置し、大半が法面となっている。このため、まず幅2mで3ヶ所（II-1～II-3区）について掘削し、造構・遺物の残存状況について調査した。その結果、いずれの調査区においてもほとんど平坦面が残存せず、造構は確認されなかった。また遺物もほとんど出土しなかった。このことから、対象地全体について掘削する必要はないものと判断し、3ヶ所のみの調査をもって終了した。

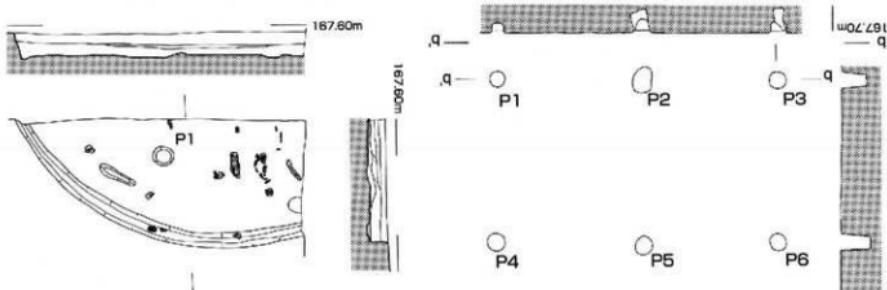


fig.278 S B01平面図・断面図

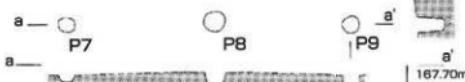


fig.279 S B02平面図・断面図



fig.280 S B01



fig.281 (左)  
S B02 P - 6



fig.282 (右)  
同 P - 9

### 3.まとめ

今回の調査では弥生時代後期～末頃の庄内式併行期の竪穴住居1棟や平安時代後半頃の掘立柱建物1棟などの遺構を検出した。

竪穴住居については、今回の調査地には隣接する地区において平成6年度に神戸市教育委員会が実施した調査でも弥生時代後期のものを1棟確認しており、規模や形状は良く似ている。また、兵庫県教育委員会が区画整理事業に伴って実施した調査においても、今回の調査地の東側に隣接する地区において、同様な規模・形状をもつ弥生時代後期の住居址を1棟検出している。なお、今回検出した住居址の大きな特徴は焼失住居であるということであるが、上記の周辺地での検出例は、いずれも焼失住居ではない。

平安時代後半の掘立柱建物については、先述の平成6年度の調査でも6棟が検出されており、概ね3時期に分かれようである。今回の検出例とこれらの建物の棟方向は、概ね似通っており、この3時期の何れかの時期に今回の検出例が属するものと考えられる。

以上、弥生時代後期～末頃及び平安時代後半においては、今回の調査地及びその周辺地は集落域として利用されていたことが明確になったといえる。

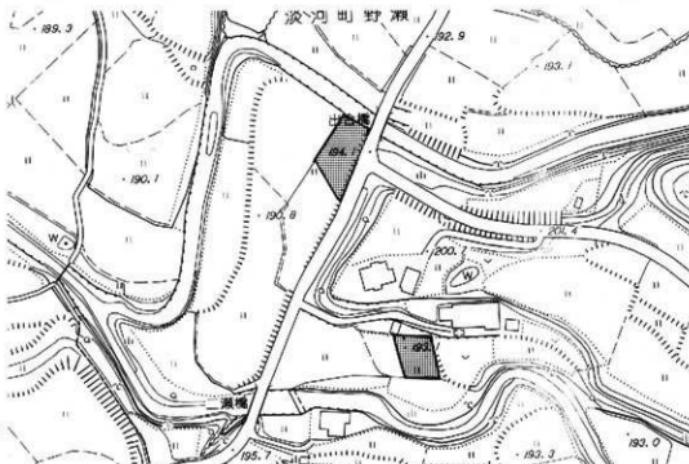
## 12. 野瀬遺跡 第2次調査

### 1. はじめに

北区淡河町野瀬地区は、淡河川の上流屏風川と鳴川が形成する中位から高位の河成段丘上にひろがる集落である。野瀬地区の東側山稜は八多町屏風地区に接し、旧国制における攝津有馬郡と播磨美嚢郡の境となっている。

野瀬地区における埋蔵文化財の調査は、平成7年度から平成9年度に淡河地区農業基盤整備事業に伴って実施された野瀬南地区における試掘調査が最初である。試掘調査の結果、鳴川左岸の大歳神社周辺の段丘上と鳴川と屏風川の合流点東側の丘陵端水田等で13世紀から16世紀の遺物包含層及び遺構が検出された。

その後、平成12年度に大歳神社西側で本格的な調査が実施された結果、掘立柱建物4棟、土坑、焼成土坑が検出され、鉄澤・輪羽口などが出土している。



### 2. 調査の概要 今回の調査は3箇所に分かれており、それぞれ第2-1～3次の調査区を設定した。

#### 第2-1次調査

第2-1次の調査区は、平成9年度に実施した鳴川右岸段丘上の遺物包含層確認地である。

#### 基本層序

概ね耕作土下約30cmで、調査区北半では地山である黄灰色粘性砂質土、南半では褐灰色砂礫土となり遺構面となっているが、調査区の北西部では10cm前後の灰色粘性砂質土の遺物包含層もしくは旧耕作土が地山上に被覆していた。

#### 検出遺構

検出遺構のほとんどが黄灰色粘性砂質土上面で検出されていることから、南半の砂礫土面では相当の削平があったと考えられる。検出された遺構は調査区北部で掘立柱建物1棟、調査区中央東辺に接して性格不明の落ち込み1ヶ所である。

**掘立柱建物** 東西3間(7.2m)、南北3間(7.0m)の正方形に近い、総柱の掘立柱建物である。建



fig.284  
第2-1次  
調査区全景

物の方向は南北で磁北に対して21度東を採る。

柱間は東西で西から2.5m、2.5m、2.2m、南北で北から2.2m、2.2m、2.5mを測る。柱掘形は、直径40~50cm、深さ35~45cm前後の円形掘形である。柱掘形の中には、柱を抜き取った後に河原石を放り込んで、柱を据え換えていると考えられるものもある。また、南側の東柱2本は内側に柱掘形を設けて柱を据え換えている。これらから1回の建替えが行われたと考えられる。

柱の抜き取り痕埋土内から須恵器捏ね鉢口縁部片、土師器皿片が出土している。

**落ち込み** 南北3.6m、東西2.2m以上の隅丸方形形状の落ち込みである。東側は高畔となり調査実施しなかった。深さは最深部で40cm、底部は平坦でなく南西部が窪んでいる。埋土は灰色砂質で、川原石が中央部に流れ込むように堆積していた。この川原石の堆積内から繩文土器片が出土している。

#### 第2-2次調査

第2-2次調査区は、第2-1次の調査区の西側一段下がった水田である。

**基本層序** 概ね北・東部では、耕作土・床土直下30cm前後で黄褐色粘質土（疊含み）の地山となり南西部は緩やかにやや上がり褐灰色砂礫土となる。この部分では遺物包含層は検出されなかった。調査区の北西部では北西方向に窪地状に緩やかに落ち込み、遺物包含層である灰褐色粘性砂質土・暗褐色粘性砂質土が順次堆積している。この下層遺物包含層の暗褐色粘性砂質土上面から掘り込まれているピット等が検出されている。

このことから地山面で検出した遺構は層位的に2時期にわたって掘り込まれていると考えられる。

**検出遺構** 検出した遺構は土坑5基、溝1条、柱列1条とピットである。

**SK01** 調査区中央部で検出した方形の土坑である。一辺1.8m前後、最深部で深さ20cm前後を測り、断面形は皿状になっている。

土坑内埋土の上層には30cmから拳大の河原石が放り込まれている。埋土内から須恵器・

土師器の破片が出土している。土坑の各辺中央で1基ずつ径20cmのピットを検出した。ピットは深さ8cm前後を測り、やや台形状の柱配置である。

**S K02** 調査区南西部で検出した平面形が橢円形の土坑である。東西3.6m、南北2.4m、深さは50cmを測り、断面形は皿状で中央部で広く平坦である。土坑内の埋土は2層に分かれ、上層は地山内に含まれる角礫が灰色粘質土を混じて堆積し、同層からは土師器・陶器・磁器片が僅かに出土している。下層には灰茶褐色粘性砂質土がほぼ水平に堆積し、同層からの出土遺物はなかった。

**S K03** 調査区の北西部で検出した不整形な土坑である。土坑の西側はS D01によって切られているが南北2.0m、東西1.5m以上、深さは最深部で30cm前後を測る。断面形はU字形である。土坑内埋土の暗茶褐色粘性砂質土内からは、須恵器・土師器の細片が出土している。なおSK03の埋没後にピットが掘り込まれている。

**S K04** SK03の西側で検出した不整形な土坑である。東側はSD01によって切られている。東西1.5m以上、南北0.8m、深さ20cm前後を測る。断面形は皿状をしている。

土坑内埋土は暗茶褐色土で河原石が多くふくまれる。埋土内からは須恵器・土師器片が出土している。位置関係からSK03と同一の遺構とも考えられるが、埋土に若干の差異が



fig.285 第2-1・2次 調査区平面図・断面図



fig.286  
第2-2次  
調査区全景

認められることから別遺構とした。

**S K05** S D01の東側、北壁に接して検出した楕円形の土坑である。東西1.6m、南北1.7m以上、深さ25cm前後を測る。土坑内埋土の上層部は地山内に含まれる礫が充填され、下層は砂質土が埋まる。土師器細片が出土している。

**S D01** 調査区北西部の谷地状落ち込みの上端に沿って穿たれた南北や溝である。幅1.0~0.7m、深さ40~12cmを残す。断面形はU字形である。溝内埋土の上層である褐灰色粘性砂質土内から土師器・須恵器の細片が出土している。

なお、溝は、削平のため南側で浅くなり、一部で途切れるが、概ね北から南に流れていたと考えられる。

**S A01** 調査区中央部の西側で検出した柵の一部と考えられる柱列である。柱の間隔は2.5m間隔で東西に5基4間分検出した。柱掘形は一辺30~40cm前後の方形で、深さ24cm前後を残す。柱掘形の埋土内には柱の抜き取り後、石材が充填され、柱の再度の据付が行われたと考えられる。

#### 第2-3次調査

第2-3次調査地は、淡河川左岸の河岸段丘上に造られた耕作地で、北西方向に野瀬城址を望む場所に位置する。

**基本層序** 現地表面から約30cmが現況の耕作土で、その下層には約20cmの厚みをもつ旧耕作土・床土が堆積する。それらを除去すると平安時代後期から鎌倉時代の遺物包含層（暗灰褐色粘質土）が堆積し、その直下に遺構面（灰黄色粘土・灰黄色砂礫）を検出する。なお、調査区の南東付近には、遺物包含層と同時期の遺物を含む濁灰黄色粘質土が遺構面の直上に堆積する。

**検出遺構** 検出した遺構は、平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物1棟・墓坑2基・土坑1基・溝2条・ピットである。これらの遺構は、主に調査区の南部で検出された。

**S B01** 南部で検出された2×2間の掘立柱建物である。柱穴はいずれも掘形直径20~40cm、深

さ20~40cmで、柱痕跡は直径20cm前後である。柱間隔は東西で約2.0m、南北で約3.0mである。建物はほぼ磁北同様である。柱穴からは、平安時代末~鎌倉時代の須恵器楕・小皿が出土している。

- S B02** 同じく南部で検出された  $1 \times 5$  m の南北に長い掘立柱建物である。柱穴は S B01 と同様の規模で、柱間隔は東西で 2.0 m 前後、南北で 1.6 m 前後である。若干南側の東西柱間隔が広くなっている。建物は、S B01 よりも若干西に振っている。

**S T01** 中央部で検出された長さ 1.5 m、幅約 0.6 m、深さ約 15 cm の長方形の墓坑である。主軸は、南北方向であるが、大きく西に振っている。遺存状態が悪く、掘形は削平されたものと考えられる。底面は、北側の一部がやや高くなっている。また南端底面からは、人間の歯が 3 点検出された。歯は、磨耗が激しく老齢の人物のものと考えられる。また、歯の出土位

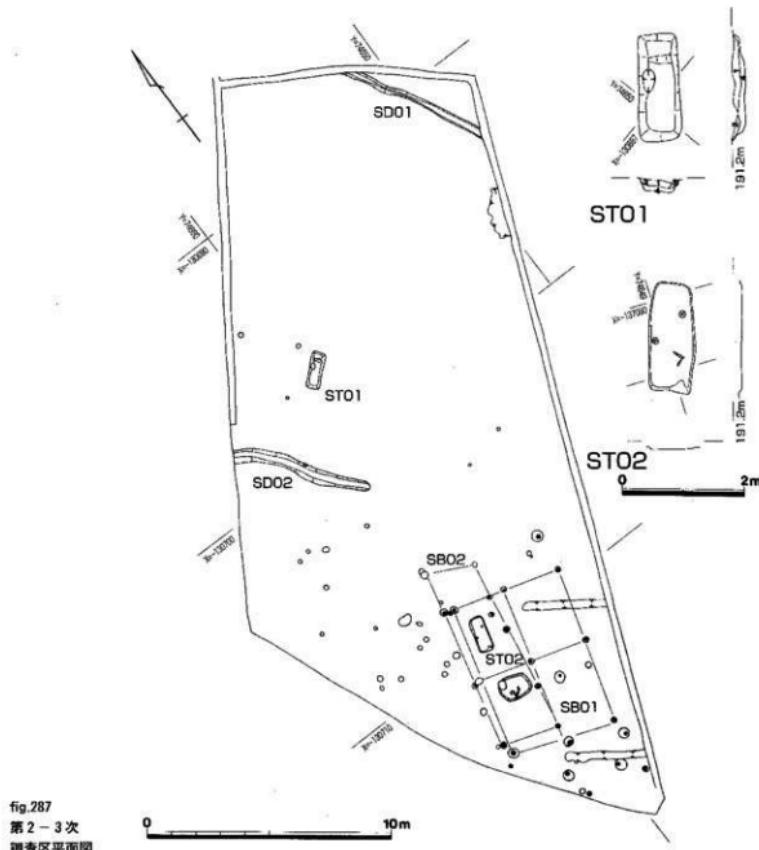


fig.287  
第2-3次  
調查區平面圖

置から南西頭位のものと推定される。埋土は暗灰黄色粘土で、木棺上の痕跡は確認されなかった。埋土からは土師器・須恵器の小破片が数点出土したのみであるが、おそらく中世のものと考えられる。

S T02 南部で検出された長さ1.5m、幅0.6m、深さ30cm前後の長方形の墓坑である。主軸はほぼ磁北方向である。この遺構も遺存状態が悪く、掘形が削平されたものと考えられる。内部は平らで、おそらくは木棺を置いたものと考えられる。底面からは、部位不明の人骨が検出された。出土遺物が確認されていないが、おそらくは中世のものと考えられる。

S K01 南部で検出された長軸1.3m、短軸1.0m、深さ5cm前後の楕円形の土坑である。主軸は、磁北方向に直交している。断面形は皿形で、炭粒混じりの黒灰色粘質土が堆積していた。埋土からは土師器・須恵器片が出土している。

溝 S D01は、北部で検出された検出長約6.0m前後、幅20~30cm、深さ20cm前後の東西南向の溝である。断面形はU字形で、埋土は濁灰黄色シルトである。しかし、東側では、拳大の礫を充填しており、暗渠状を呈する。

S D02は、中央部西側で検出された検出長約6.0m、幅50cm前後、深さ10cmの東西方向の溝である。断面形は皿型で、灰褐色系の粘質土が堆積していた。埋土からは、土師器・須恵器小片が出土した。

3.まとめ 今回の第2-1および2次調査では、掘立柱建物、土坑、溝、柵列、落ち込みなどを検出した。柵は、掘立柱建物とほぼ同一方向を探っている。掘立柱建物の時期は、柱抜き取り痕内埋土出土の遺物から12世紀前半に比定でき、柵は掘立柱建物と同一時期に造作されたと考えられる。

また、落ち込み内から出土した縄文土器は宮滝式土器と考えられ、付近に縄文晩期の遺跡の存在が想定される。

一方、第2-3次調査では、掘立柱建物2棟と墓坑2基を検出した。掘立柱建物掘形内から12世紀前半の須恵器碗が出土していることから、今回調査実施した段丘上には平安時代後期の集落が相当規模で営まれていたと考えられる。またS T01は、建物や磁北と異なる主軸方向をもつ。その延長線上には、丹生山・帝釈山が見え、当時の信仰を示すものではないかと考えられる。一方、S T02は、その検出位置から屋内墓の可能性が高い。

調査地の北西、屏風川対岸には方形居館と考えられる野瀬城推定地が河成段丘上に位置することから、今回の調査地でも野瀬城に関連する遺構が発見されることが予想されたが、予想より古い建物を検出し、当地域における中世社会の形成が平安時代後期に遡ることが判明し、土豪野瀬氏の領域支配もこの時期には成立していたと考えられる。今後文献面での検討が必要と思われる。



fig.288 S T02

## 13. 野瀬北遺跡 第1次調査

### 1. はじめに

北区淡河町野瀬北地区は、美嚢川の支流である淡河川の上流域で蛇行して流下する屏風川に沿って広がる地区で、東西約2km、南北約600mに及ぶ範囲で、地形的にみると、河岸段丘面と丘陵部斜面で構成され、現状は比較的狭小な棚田が展開する地域である。

事業地の西端には、野瀬城が存在するが、その詳細は不明である。古来より三木街道（現県道三木三田線）に沿って集落が形成されてきたようで、石峯寺の表参道への分岐点ともなっている。また、戦国時代に羽柴秀吉が石峯寺攻撃の際に陣を置いた時、昼食に瓜の味噌漬けを提供したという伝説のある「味噌屋垣」の字名もみることができる。また、道路工事の際に掘り出されたという「若嶋栄助墓 安政四年十月」と刻まれた相撲取りの墓石なども知られている。

野瀬北遺跡は平成13・14年度に埋蔵文化財の試掘調査が実施され、平安時代前期あるいは中世～近世にかけての集落遺跡であることが判明している。今回の調査対象地区はこれら文化財が確認された範囲に含まれ、圃場整備の工事施工によって遺跡が破壊される部分である。野瀬北遺跡内では初めての発掘調査となる。



fig.289  
調査位置図  
1:5,000

### 2. 調査の概要

今回の調査対象地は1区～4区、5区、6区の大きく3ヶ所に分かれている。このうち1区～5区は圃場整備工事によって切り土になる部分であり、6区は排水路及び道路になる部分である。

#### 1区

2面の遺構面を確認した。第2遺構面が2区～4区で検出された遺構面と層位的に対応し、第1遺構面はより上層となる。

#### 第1遺構面

1区の西端部にのみ遺存する遺構面である。小溝とピットを検出した。小溝とピットから、須恵器と土師器の細片が少量出土している。近世の陶磁器が出土していない事実から、

第1造構面の時期については、中世後期の範疇には納まると考えられる。

第2造構面 堀立柱建物2棟と井戸の他、土坑、小溝やピットを検出した。

S B01 東西2間×南北2間以上の規模をもつ、総柱の堀立柱建物である。柱間は東西が約2.0mで南北が約1.7mである。柱穴は幅約15~20cmで、深さ約10~20cmを測るものが大半である。建物方位は座標北から約3度東へ振っている。

柱穴から中世の須恵器と土師器の細片が少量出土している。S B02とはほぼ同じ建物方位であることから、S B02とそれほど時期差がないものと思われる。

S B02 東西3間×南北1間以上の規模をもつ、堀立柱建物である。柱間は東西約1.8mで、南北が約2.1mである。柱穴は幅約15~20cmで深さ約8~30cmを測るものが大半である。建物方位は座標北から約4度東へ振っている。

柱穴から中世の須恵器と土師器の細片が少量出土している。柱穴が14世紀の造構であるS E01に削平されており、それ以前の建物であることが分かる。

S E01 調査区東端部で検出した石組の井戸である。掘形の幅は上面で約3.5mを測るが、中位以下は約1.4mとなる。井戸の幅は上面で約1.0m、底部で約0.6mを測る。深さは約3.3mである。廃棄時に井戸内へ多くの大砾が投棄されている。

遺物は、井戸の最下層から14世紀の須恵器鉢の破片が出土しており、掘削された時期もそれぐらいであろう。また最下層から、漆塗楓も出土している。

S K01 径約0.5×1.1mで深さ約25cmを測る、不整形の土坑である。埋土に炭化物を極めて多く

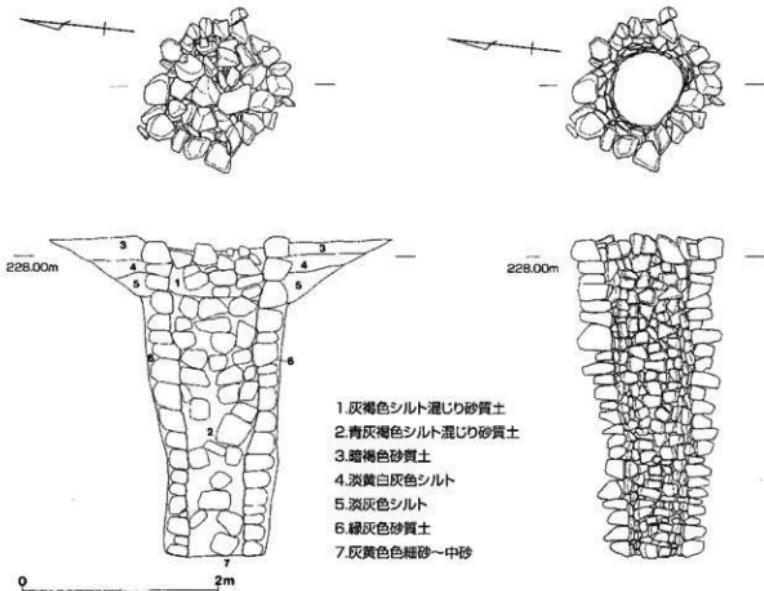


fig.290 S E01 平面図・断面図・立面図



fig.291 1区全景



fig.292 S E 01

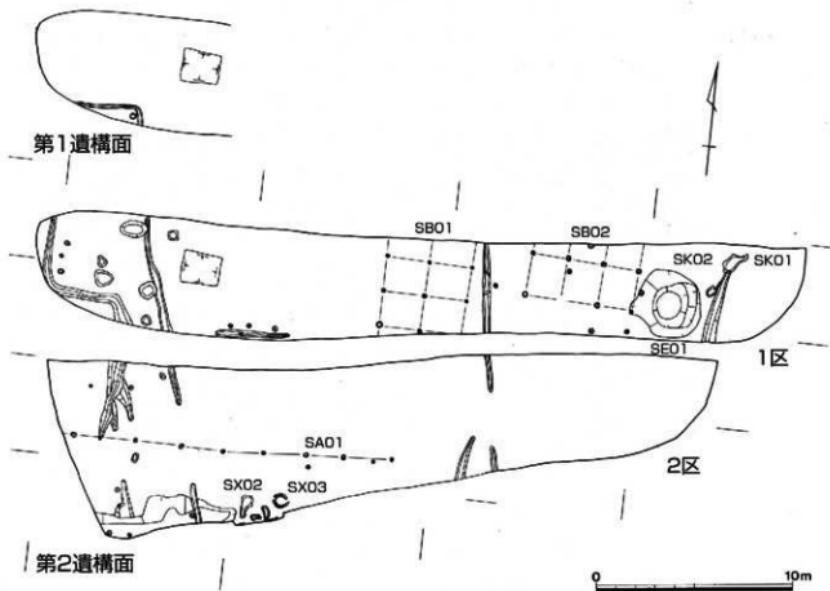


fig.293 1区・2区平面図

含む。遺物は出土していない。

S K02 径約0.4×0.65m、深さ約15cmを測る不整形の土坑である。埋土に炭化物を極めて多く含む。遺物は出土していない。

2区 1区の南側の田圃面の調査区である。柵列と、底部が焼土化した何らかの生産遺構を検出したほか、小溝とピットも検出した。

S A01 ほぼ東西方向に延びる柵列であり、7間まで確認している。柱穴は径約20cmで、深さは10~30cmである。うち1基には杭痕も遺存する。1区S B01・02の双方と、方位がほぼ揃う方向に延びている。

遺物は須恵器と土師器の極小片が出土している。細かな時期を決定できる遺物は出土していないが、近世の遺物は出土していない事実から、中世の柵列だと思われる。

S X02 調査区南西部で2個1対の細長い梢円形の土坑を検出したが、土坑の周囲と底部は焼土化しており、埋土には極めて多くの炭化物の他、焼土ブロックも含んでいる。何らかの生産遺構となる可能性が考えられるが、現段階では詳細は不明である。作り替えが行われている様であり、底部の焼上面が2面存在する。

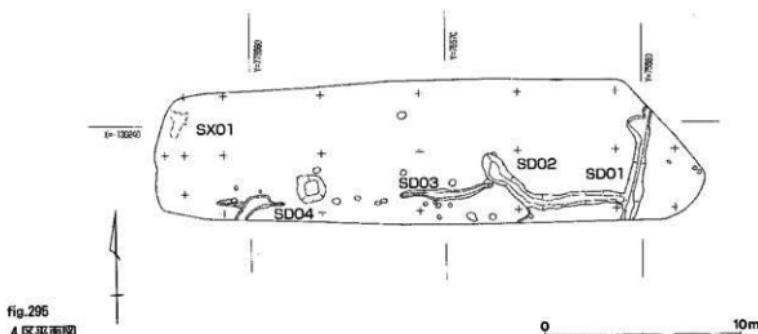
土坑は第1次焼成面で、幅約30cmで、長さはそれぞれ約1m、0.7mを測る。深さは約12cmである。第2次焼成面では幅約50~60cmで、長さはそれぞれ約1.2mと0.8mを測る。深さは約20cmである。

遺物は土師器の細片が少量出土しただけであり、正確な時期は判断できない。近世の遺物を含まないことから、中世の範疇に納まる可能性が考えられる。

S X03 2個1対の円弧状を呈する細長い溝状の遺構である。埋土には炭化物を極めて多く含んでいる。おそらくS X02と同様の性格をもつ遺構だと考えられる。溝は幅約15cmで、長さはそれぞれ約0.8mと0.95mを測る。深さは深い部分で約9cmである。



fig.294 S X02



**3区** 2区の南側に約40m<sup>2</sup>の畠面の調査対象地が3区として掘削予定であったが、2区の状況から埋蔵文化財の存在する可能性も低いと判断されたため、掘削せずに調査を終了した。

**4区** 1区～3区から小道を挟んで西側に所在する田畠面に設定した調査区である。土坑1基、溝4条、ピット約20基を検出した。

**SK01** 1.4×1.4m、深さ約35cmを測る。人頭大の疊5個が投棄された状態で検出された。  
須恵器・土師器片が出土しており、14世紀頃の遺構と考えられる。

**SD01** 調査区東部で検出したほぼ南北方向に流れる溝で、幅は概ね50cm～1mで、深さ約13cmを測る。北部にやや膨らむ部分があり、幅約1.1mを測る。須恵器・土師器・陶器・磁器が出土している。15世紀頃の遺構と考えられる。南部でSD02と合流している。

**SD02** SD01の西側で検出した溝で、西半部分は北西から南東方向に流れ、東半部分は東西方向に流れてSD01に合流している。15世紀頃の遺物が出土しているが、特に北端部で須恵器・土師器・陶器・磁器・焼石がまとまって出土している。

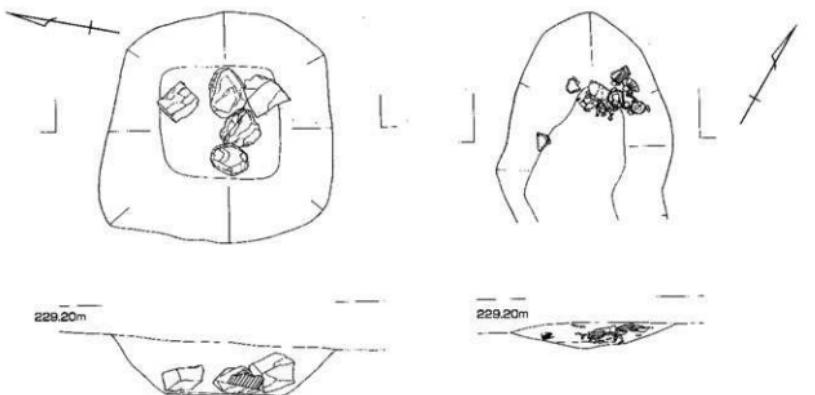


fig.296 SK01・SD02 平面図・断面図

**ピット** ピットは径20~40cmのものを約20基検出しているが、調査区内で建物としてまとまるものはない。ただし、S P03・04は深さ35cm程度、S P13・14は深さ50cm程度を測り、柵列や建物の一部である可能性が高いものと考えられる。

**5区** 4区の約140m南西に位置する調査区である。県道三木・三田線から北側へ分岐する粟島神社への参道の西側に所在する。水溜状造構1基、溝4条、不定形の落ち込み7基、ピット約100基を検出した。

**S X01** 調査区南東部で検出した、径3.5×3.08mの平面形がやや重な円形を呈する土坑で、最深部の深さ約70cmを測る。上半部を中心に、拳大から一抱え人までの多量の礫とともに土師器・陶器が投棄されている。後述するように南部にS D01・04が東・両方向にとりついていることや、埋土下層にはシルト層が堆積していることなどから判断すれば、このS X01は水溜状の造構と考えられる。出土遺物から15世紀頃の造構と考えられる。

**S D01・04** 前述のS X01の南部に東側と西側にとりつく溝で、東側の溝をS D01、西側の溝をS D04と呼称する。S D01は調査区東端部で二股に分かれており、南東方向に流れる本流部分をS D01-1、南下するものをS D01-2と呼称する。S D01-1は幅0.98~1.3m、S D01-2は幅0.56~0.68m、S D04は幅0.8~1.3mを測る。以上のように個別の名称を付したが、検出状況からS D01-1・2、S D04は一連の造構と考えられる。S D01-1・04の深さは約25cmとあまり深くなく、この両者とS X01が接する部分でみると、溝とS X01の底とでは約54cmの高低差がある。以上の状況から、溝S D01・04はともに水溜状造構S X01の余水を東・西両側に排水する機能を有していたものと考えられる。15世紀頃の須恵器・土師器・陶器が出土している。

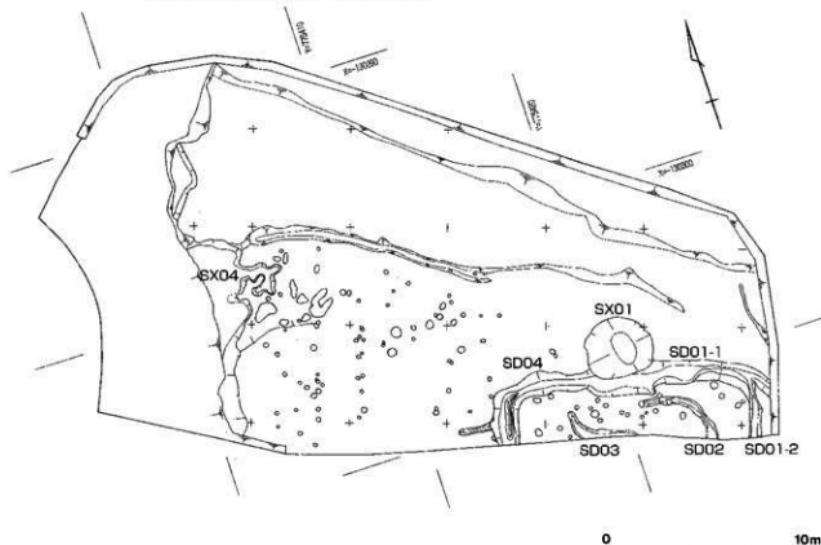


fig.297 5区 平面図

**S X04** 調査区西端部は谷となっており、遺構面は存在しない。この谷の東側で不定形の落ち込みを検出した。土坑状のものが大半であるが、S X04は大きな落ち込みとなっている。一抱え大までの礫が投棄されたかあるいは流れ込んだ状態で検出された。土師器・陶器・磁器が出土している。時期については、整理作業の進展を待って検討したい。

**ピット** ピットは径15~56cmのものを約100基検出したが、調査区内で明確に建物としてまとまるものは確認できていない。ただし、調査区南西部では深さ約45cmを測り、建物の一部と考えられるものも検出しており、さらに検討を加える予定である。



fig.298  
S X01・  
SD01・04



fig.299  
5区 全景

**6区** 6区とした調査区は幅8m、総延長約30mで、排水路および道路施工部分に当たる。北から枝番を付して、各調査区を呼称している。

床上直下に暗灰褐色粘質土の遺物包含層が厚さ5~15cmで堆積し、基盤層は明黄色粘土あるいは乳黄色砂礫混粘土である。

**6区-1** 6区-1は6区では最も高位に位置する圃場である。北半は近世以降の開墾によって削平されたためか、全く遺構は確認できず、ほぼ水平な基盤層面を確認したに留まる。

一方、南半は遺存状況が極めて良好で、礎石建物2棟、土坑、溝、ピットなどの遺構が集中して確認された。当初は旧地形の傾斜面に遺物包含層が形成されたものと予想されたが、緩やかな傾斜面を切って形成された平坦面が造成され、この平坦面上に遺構が形成されていったものと考えられる。遺物の整理作業が実施できていないので、各遺構の時期は詳らにできないが、切り合い等から復元的にみていくたい。

**S D201** 最初に営まれた溝状遺構で、最大幅0.8m、深さ0.10mで、東西方向に延びる。土師器・須恵器・鉄製品などが出土している。

**S K202** これを切るのがS K202で、長径0.90m、深さ0.30mの梢円形の土坑である。土師器・須恵器の小片が出土している。また、埋土の状況が酷似し、人頭大の礫が放り込まれたSK201も当該期の遺構と考えている。以上の遺構は出土遺物の特徴から鎌倉時代前半のものと考えている。

**礎石建物** S D201あるいはSK201の埋没後に形成されたのが、礎石建物（下層）と想定できる。

礎石建物（下層）は当初北側列4間分（柱間の心地距離2.1m）が確認されたが、東西の桁行を確認するために、調査対象地区の西側の延長線上で柱間に合致する箇所を中心として1×1mの拡張区（拡A・拡B）を設定し、調査したところ、東西は4間（8.5m）と確定でき、東端の礎石1基については機能が明確にできなかった。なお、南北方向の梁行は2間と考えているが、さらに南に半間分で礎石が確認でき、南側には廂が付く可能性



fig.300  
6区-1 全景



fig.301 6区-2 全景

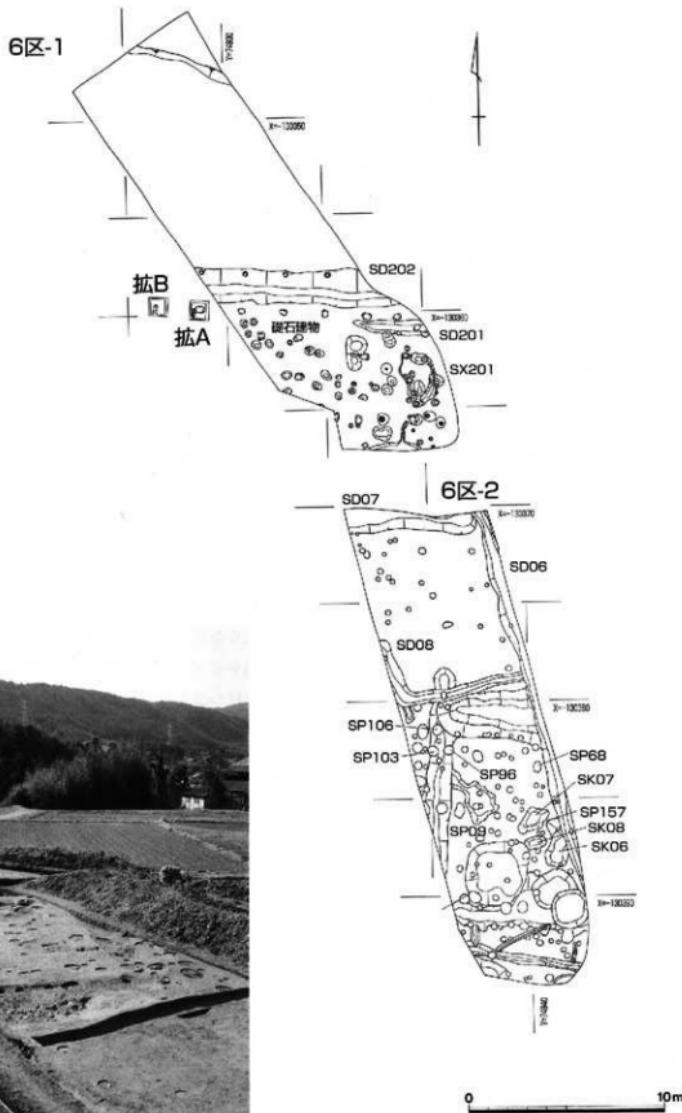


fig.302 6区-1・2 平面図



fig.303  
6区-1  
鍛冶関係遺構

がある。なお、礎石はいずれも掘形を持たず、基盤層に直接置かれており、礎石の上面の標高は209.70m前後である。

また、S D202の北肩には礎石列と対応するように柱間2.1mで、柱穴が確認されており(S P301~304)、礎石建物の上屋構造を考えいく上でも興味深い。

**S K203・204** S K203・S K204・S K206・S K207は、いずれも直径60cm前後、深さ約5cmの円形土坑の底部に、青灰色の還元状態の炉壁が下部構造を持たずに据えられたもので、埋土は概して黒色炭灰層である。鍛冶に関連する遺構と考えられる。

**S X201** 不整形の浅い落ち込みに円弧を描く溝やピットが伴う遺構で、埋土は概して焼土・炭を多く含む黒色炭灰層である。東側に突起状の落ち込みがあり、ここでも炉壁が出土している。拳大の鉢溝も出土しており、この遺構も鍛冶に関連する遺構であろうか。礎石建物(下層)との時期的な前後関係は現状では不明である。

**礎石建物** S D202の南肩部で礎石建物(下層)を覆うような上手状の盛土の南側全面に約20cmの盛土が施された後營まれた建物と考えられ、5個の礎石が確認できただに留まり、現状では方形に収束するようには検出できていない。柱間は礎石建物(上層)と全く同じで、2.1mである。礎石上面の標高は209.90m前後である。盛土内には土師器・須恵器・鉄製品(刀・鎌など)などの多量の遺物が含まれ、15世紀を降らない時期と考えている。

**6区-2** 6区-2は地元で「地神さん」と呼ばれる小森の東側に接した圃場である。確認できた遺構には、溝状遺構5条、土坑3基、不整形落ち込み6基、柱穴を含むピット約140基などがある。

**S D07** 北端で確認した東西方向を指向する溝状遺構で、最大幅1.3m、深さ12cmで、西側に延びる。出土遺物には完形品を含む土師器・須恵器・陶器などがある。なお、東端は現在の水路と並行して走るS D06に切られている。

**S D09** 南北方向を指向する溝状遺構で、S D08およびS X15ほかピットに切られている。出土遺物には土師器・陶器がある。

- S K06** S D06に切られる長楕円形の土坑で、東へさらに延びる。長径2.9m以上、短径1.2m、深さ18cmである。拳大前後の礫とともに、土師器皿が大量に投棄されている。
- S K07** 柱痕をもつS P157を切る土坑で、人頭大前後の礫が中位以下で集積されている。長径1.8m、短径1.2m、深さ30cmである。
- S K08** S K07の南に位置する楕円形の土坑で、S X11に切られている。長径1.15m、短径0.6m、深さ45cmである。人頭大的礫が放り込まれている。

**ピット** 確認できたピットのうち、柱材が遺存するものはS P37・157・68・85・96などが挙げられる。これらのピットはいずれも直徑約50cm、深さ約50cmのやや大型の平面形態のもので、柱材の直徑は約20cmである。また、S P106のように備前焼の甕口縁部と土師器皿がまとまって出土したピットなどもある。現状では掘立柱建物を復元できるまでには至っていないが、今後改めて検討が必要であろう。

**6区-3・4** 調査区は幅8m、総延長約25mで、排水路および道路施工部分に当たり、丘陵裾から段丘面へ下った平坦面付近に当たるものと考えられる。

床土直下に暗灰褐色粘土質の遺物包含層が厚さ5~10cmで堆積し、基盤層は明黄色粘土あるいは乳黄色砂礫である。

6区-3は現畦畔が集合する場所に当たるため、十分な調査面積が確保できていない。確認できた遺構には、溝1条、ピット7基、不整形の落ち込み2基がある。

6区-4は調査地で最も下位に位置し、地元では「五右衛門山」と称されている圃場である。開田の際に削平を大きく受けたものか、上記の調査区とは基盤層を異にし、明黄色砂あるいは乳黄色砂礫混じり粘土で構成され、6区-3とは遺構面で約30cmの段差がある。

確認できた遺構には、土坑6基、落ち込み5基、溝3条、素掘り井戸1基などがある。

**S X01** S X01は東西長約12m、南北長約7m以上の方形の落ち込みで、底部は東半部が1段落ち込んでおり、最大深さ25cmである。円弧を描くS D03が北東隅に取り付く。土師器土釜がまとまって出土しているほかには、土師器片や陶磁器片が出土している。15世紀代の遺構と考えられる。

**S X04** S X04は6区-4西半で確認した東西方向に主軸を採る楕円長方形の土坑で、最大長3.10m、幅0.80~0.90m、深さは中央部付近で最大38cmである。埋土の下半層は灰色系の





fig.305  
6区-4 全景

シルト層で、中位以下には拳大～人頭大の礫が充満されている。上半層は炭や焼土を含む暗褐灰色系の粘質土である。出土遺物には土師器・須恵器・瓦片がある程度で、明確な時期は不明である。

### 3.まとめ

今回の調査では、中世後期～近世に至る時期の集落域の存在を確認した。特に大きな成果を得たのは6区の調査である。

6区では、2時期にわたる礎石建物に加え、鍛冶に関連する遺構などの存在を確認した。以上の遺構は、「御屋敷」隣保と地元で呼称される地域であることと合致するような成果と伝えられ、上淡河地域の有力者の屋敷が形成されていたものと考えられる。

また、1区では14世紀の石組の井戸1基やそれ以前の掘立柱建物2棟を検出している。

当該時期と考えられる遺構は、4区でも土坑1基（SK01）を検出している。今回の調査が第1次調査であり、断定はできないものの14世紀頃に野瀬北地区の開発が初めて行われた可能性を現段階では考えておきたい。

先述の6区で検出した遺構と同様な時期（15世紀頃）の遺構は、他の調査区で検出している。4区のSD01・02や5区のSX01も15世紀頃の遺構と考えており、当該時期が野瀬北地区の集落の一つの盛期であった可能性が高いといえよう。

2区で検出したSX02・03は何らかの鍛冶・生産に関連すると考えられる遺構と考えられ、6区で検出した鍛冶関連遺構とともに示唆に富む遺構といえよう。

今回野瀬北地区において初めての発掘調査を実施し、これまでに述べてきたように各時期の遺構・遺物を確認した。今後出土した多種多様な遺物の整理作業が進めば、各遺構の詳細な時期の判明とともに遺跡の具体像がより明らかとなるものと考えられる。また、今後周辺地での調査が進めば、野瀬北遺跡の様相がさらに明らかになっていくであろう。石峯寺を中心とする中世寺院の展開や戦国期の動乱との関連もこれから的过程のなかで次第に明らかになっていくものと考えられる。

## 14. 長田神社境内遺跡 第15次調査

### 1. はじめに

長田神社の境内で遺跡が発見されたのは、大正15年である。神社の社殿が火事で焼失し、その再建工事中に土器などが出土したことがきっかけだったといわれている。

その後、昭和60年に神戸市都市計画局による再開発事業によって発掘調査が開始された。この調査が皮切りとなり、以後長田神社遺跡の発掘調査は14回を数える。

遺跡は、弥生時代の集落に伴う堅穴住居や掘立柱建物、人工的に掘られた構など、数多くの遺構が見つかり、小型の銅の鏡、土偶などといった珍しい遺物も出土している。



### 3.まとめ

過去の発掘調査の結果から、長田神社境内遺跡の弥生時代後期の集落は、比較的大規模なものだったと考えられている。今回の調査結果から、この頃の景観を復元すると、以下のようになる。

今回の調査地は、長田神社境内遺跡の範囲の中で、ほぼ中央に位置するが、検出された幅15m以上ある大きな河が集落のほぼ中央を南北に貫いていたと考えられる。

また河の中に堆積した土層から、葦のような水生植物の残存体が多く確認されていることから、河岸には葦が生い覆っていたと思われる。さらに過去に今回の調査地のすぐ西側で竪穴住居が発見されていることから、河のほとりに何棟もの家が建てられていたと考えられる。

この川は古墳時代前期においても埋まりながらも機能していたと考えられる。

遺跡の中心を流れる河川の存在は、当時の人々にとっても大きな意味を持っていたと思われるが、この河については、今日もこの付近を流れている苅藻川の、1700年前の姿と考えてよいだろう。

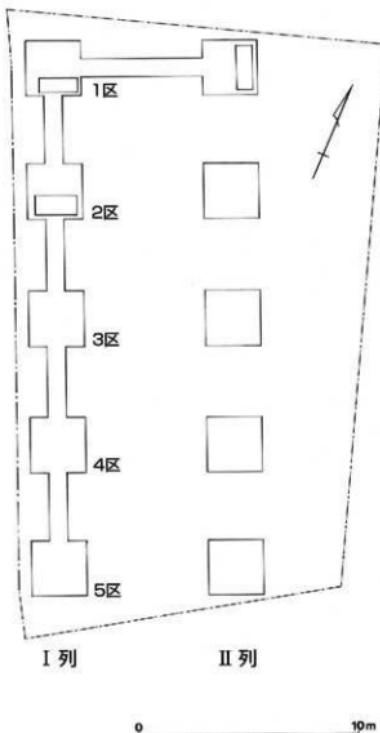


fig.307 調査区平面図

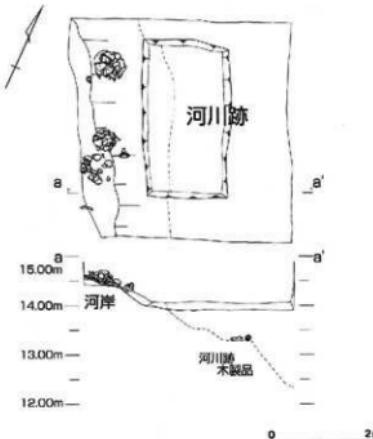


fig.308 I - 1 区 平面図・断面図

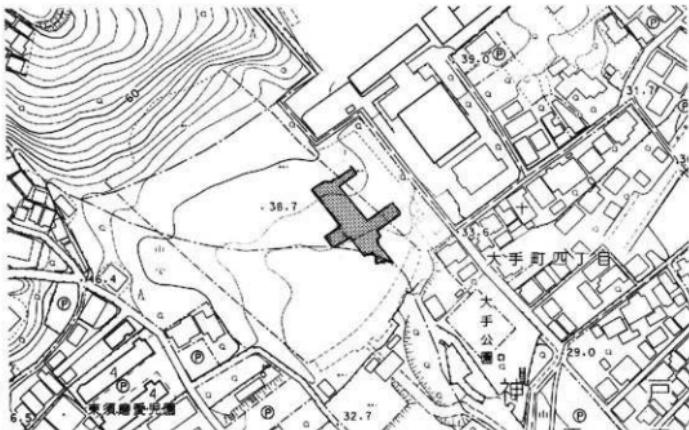


fig.309 I - 1 区 遺物出土状況

## 15. 大手町遺跡 第7次調査

### 1. はじめに

大手町遺跡は、丘陵末端部の微高地に位置する遺跡で、調査地の標高は36~37m付近である。平成7年度に都市計画道路山麓線建設事業に伴う調査によってその存在が明らかになった比較的新しい遺跡で、これまでの調査では縄文時代から近世の遺構・遺物が確認されている。中でも弥生時代中期・後期の遺構・遺物がまとまって確認されている。



### 2. 調査の概要

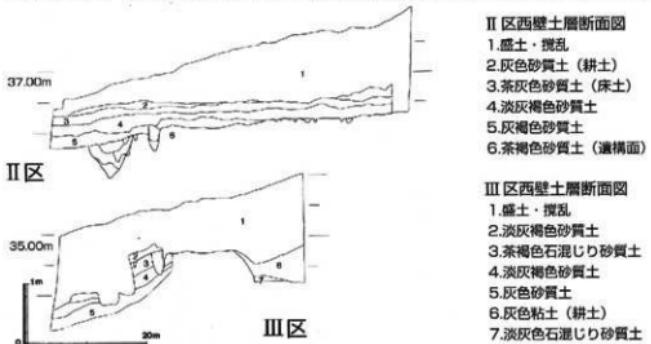
調査地は、北から南へと傾斜しており、遺構検出面での南北の比高差は約1mである。

調査は宅地造成の街路部分に相当し、枝分かれしているため、便宜上北からI区・II区・III区・IV区・V区とよぶ。

さらに、調査区の北側、工事影響範囲についても試掘調査を実施し、3ヵ所のトレーニングを掘削している。試掘トレーニングではいずれも遺構・遺物は確認されていない。

#### 基本層序

上層より盛土・搅乱層、灰色砂質土（旧耕土層）、淡灰色砂質土（旧耕土層）、茶灰色砂質



土（床土層）、淡灰褐色砂質土（包含層）、茶褐色石混じり砂質土（遺構面）となっている。淡灰褐色砂質土層は、包含層に相当する層と考えられるが、あまり遺物は出土していない。

調査地は深い搅乱が多く、Ⅲ区およびⅤ区は盛土・搅乱層の直下に遺構面が削平された状態で検出した。また、Ⅳ区は後後に小河川が流れていたと考えられる堆積層があり、遺構面が存在しない。

I区 I区の西半は搅乱により、遺構面が大きく削平されていた。遺構面である茶褐色砂質土層は粗砂・小石を多く含み安定しておらず、包含層と考えられる淡灰褐色砂質土層に遺物は含まれず、遺構も確認されなかった。

II区 II区は比較的搅乱の影響が少ない地区で、淡灰褐色・淡灰色砂質土を埋土にもつ耕作痕（鋤溝）・溝・小ピットと、灰褐色・黒褐色砂質土を埋土にもつ土坑・落ち込み・ピット等が同一面で検出された。前者については遺物が微量なため時期が判明しないが、後者は弥生時代中期と後期の2時期の遺物が出土している。

鋤溝 耕作痕は、調査区の北と南でそれぞれ数条まとめて検出された。北の耕作痕は東西方向のみの幅0.1~0.3m、深さ0.2m程度と浅い。南の耕作痕は南北方向と東西方向に検出され、南北方向の溝を東西方向にやや幅の広い溝がきる。いずれの耕作痕も弥生時代中期・後期の遺構を切っている。

SK08 長径1.1m、深さ0.2mの不整形な形状を呈す。弥生時代中期の壺形土器・サヌカイト等が出土している。鋤溝およびSX01と切りあう。

SK11 直径0.8m、深さ0.2mを測る。弥生時代中期の壺形土器等の遺物が出土している。

SX01 長径3.2m、深さ0.5mの不整形な形状を呈す。遺構の西側に搅乱を受けている。遺構底面は平坦でなく、底面付近より弥生時代中期の大型台付鉢形土器・壺形土器などが出土している。

SX02 直径2.5m、深さ0.6m、の不整形な形状を呈す。遺構の東側に搅乱を受けており、断面



fig.312  
II区全景

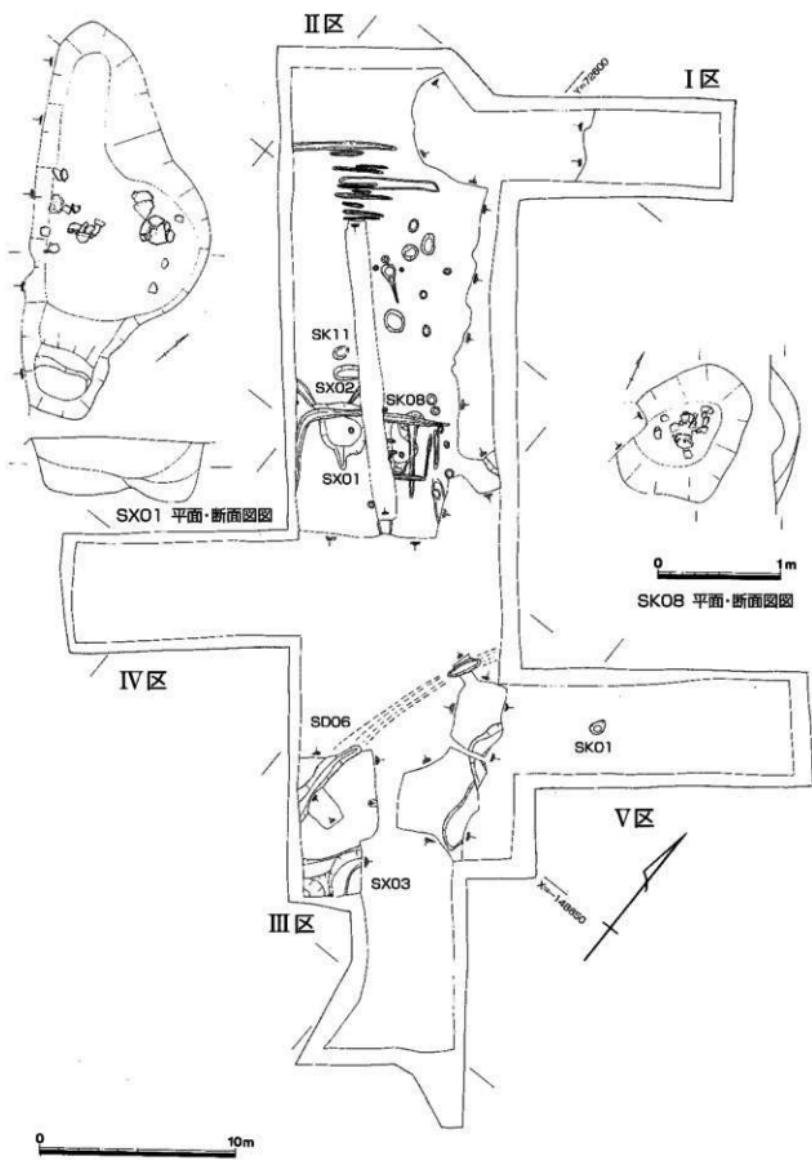


fig.313 調査区平面図

は浅いすり鉢状を呈す。中層の暗灰色炭混じり砂質土層より弥生時代後期の壺形土器・高壺形土器・手づくね形土器・いい蛸壺形土器・磁石などの遺物が出土している。いい蛸壺形土器は全部で3個体出土しており、埋没する過程で何らかの祭祀的なことが行われた可能性を考えられる。いい蛸壺形土器の内1点には波状文の線刻が確認できる。

### III区

III区は南半が大きく削平されており、IV区と接する北側も旧河川によって遺構面が削平されていた。III区で検出した遺構は溝・落ち込み・ピットである。

### S D06

III区を北東から南西に縦断する。最大幅0.6m、深さ0.5mを測り、断面はU字形を呈す。弥生時代後期の壺形土器・壺形土器・鉢形土器などがやまとまって出土しているが、いずれも細片であるため図化可能であったのは鉢形土器のみであった。

### S X03

最大深さ0.3m、北から南へ傾斜する地形変換点に堆積したと考えられる落ち込みである。底面は溝状を呈し、弥生時代中期の遺物が底面付近からまとまって出土している。特に大型の壺形土器は、1個体分が土圧で押しつぶされた状態で出土している。他に壺形土

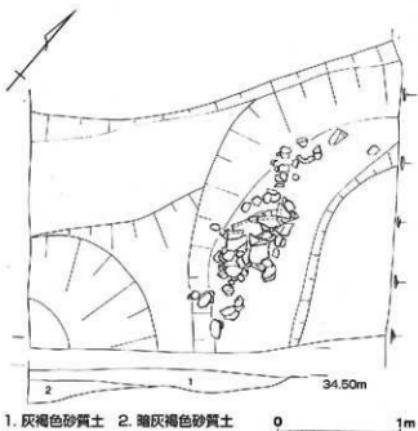


fig.314 S X03平面図・断面図

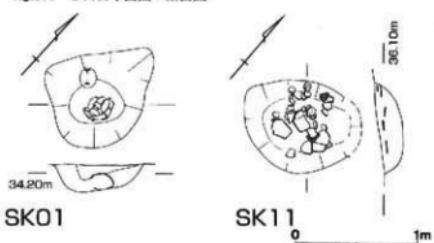


fig.315 SK01平面図・断面図



fig.316 SK11平面図・断面図

fig.317 SK03(上)・SK01(中)・SK11(下)

器、砥石、サスカイトが出土している。

**V区** V区は擾乱を除去すると、隣接するIII区から約0.5m程度低い位置に遺構面が存在しており、当初遺構は検出されないと予想されたが、土坑・ピットが検出された。このことから、III区とV区は現地表面以上に西から東へと傾斜していたと考えられる。

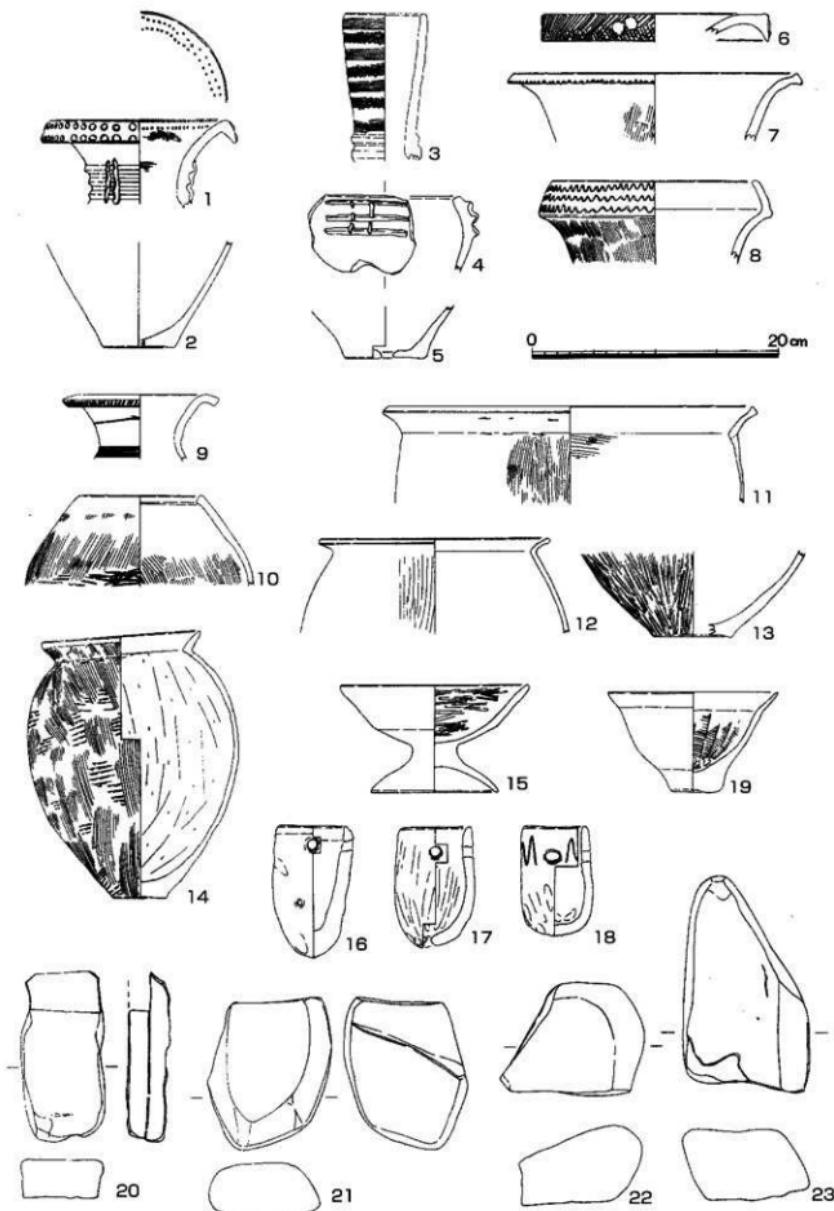
**SK01** この土坑は直径0.7m、深さ0.2mの不整形な形状を呈す。弥生時代後期と考えられる甌が1点土圧でつぶれてはいるものの、完形の状態で出土している。

**3. まとめ** 今回の調査は従来の大手町遺跡の範囲外ではあるものの、これまでの調査と同様、弥生時代中期と後期の遺構が検出された。このことから、同じ微高地上に展開する同一の遺跡と考えられる。

また堅穴住居こそ検出されなかったものの、遺構面の削平されていない部分については、弥生時代中期・後期の良好な一括資料が出土している。



fig.318  
調査地遠景



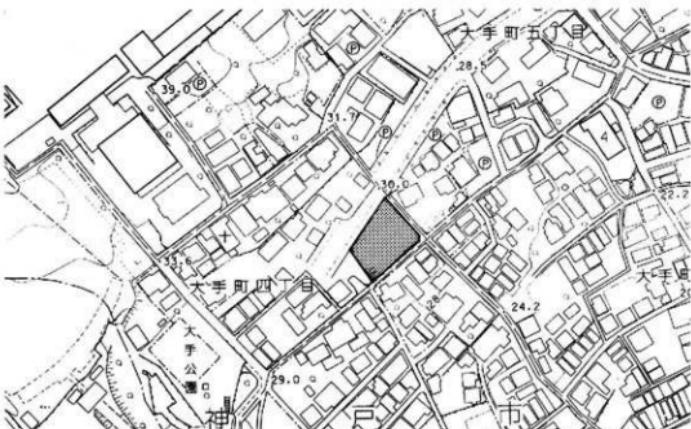
(1~8·23:SX03, 9~13·21:SX01, 14:15~18·20:SX02, 19:SD06, 22:SK03)

## 16. 大手町遺跡 第8次調査

### 1. はじめに

大手町遺跡は、妙法寺川の支流東細沢谷川西岸の丘陵上に位置する遺跡である。

平成7年度に、都市計画道路山麓線代替地宅地造成に伴う試掘調査で、初めてその存在が確認され第1次調査が実施されて以来、街路築造工事、宅地造成工事に伴う調査により、弥生時代中期～後期を中心に、縄文時代～近世にかけての遺構、遺物が検出されている。特に平成11年度に実施された第5次調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の堅穴住居が検出され、手焙形土器、絵画土器が出土した。



### 2. 調査の概要

調査地は、元来傾斜地であったものが造成により、ほぼ全域が削平を受けていた。僅かに2区の南半において遺物包含層を検出することができた。

2区南半では、盛土・整地層下に微細な遺物を包含する暗褐色砂質シルトが存在し、この下層に上から、古墳時代後期の遺物包含層である黒褐色砂質シルト（5層）、黒灰色砂質シルト（7層）、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層である暗褐色砂質シルト（8層）が堆積する。この下層は中央部付近では地山層である淡茶灰褐色細砂であり、南へ下がる状況が観察されるが、南半部では工事影響深度下となるため、調査を完了しており、下層の状況は不明である。

#### 1 区

過去の造成に伴う削平により、遺構・遺物は確認されなかった。

#### 2 区

古墳時代後期のピット1基、弥生時代末～古墳時代初頭の土坑2基、ピット5基、時期不明の土坑1基を検出した。

#### S K01

S K01は調査区南半の傾斜面上から検出された、全長130cm、幅83cm、検出面からの最大の深さ40cmの土坑である。上部は削平により失われている。握り拳大の石数点が入れられていた。弥生時代末～古墳時代初頭の遺物が出土した。

#### 3 区

土坑墓と考えられる長方形の土坑2基、ピット4基を検出した。

**S T01** 調査区中央東寄りで検出した全長255cm、幅80cm、検出面からの深さ13cmの長方形の掘形をもつ遺構である。主軸線はやや北寄りの北東—南西方向である。埋土から微細な遺物が出土した。

**S T02** 調査区中央西寄りで検出した全長275cm、幅93cm、検出面からの深さ11cmで長方形の掘形をもつ遺構である。主軸線はやや西寄りの北西—南東方向である。埋土から弥生時代末～古墳時代初頭頃の甕片や微細な細片が出土した。

**3.まとめ** 今回の調査では、過去の造成による削平がほぼ全域に及んでいたものの、弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代後期の遺構・遺物を検出することができた。

2区では調査区の南半部から4層の遺物包含層と3面の遺構面を検出したが、谷状地形が削平から残されたものと考えられる。

3区から検出されたS T01と02は、掘形内から木棺などの埋葬施設や、副葬品などは出土しなかったが、プランの形状や、両者が直交する状況から土坑墓であると考えられる。

今回の調査地の丘陵上部に位置する山麓線部分の調査地と、当該地の間は、過去の造成により、削平されている部分も存在するものの、旧地形の谷の部分には遺構面が遺存するものと考えられる。また、弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代後期の遺構面がさらに南側に広がることが確認されたことは、大手町遺跡の全体を考える上で貴重なデータと言えよう。

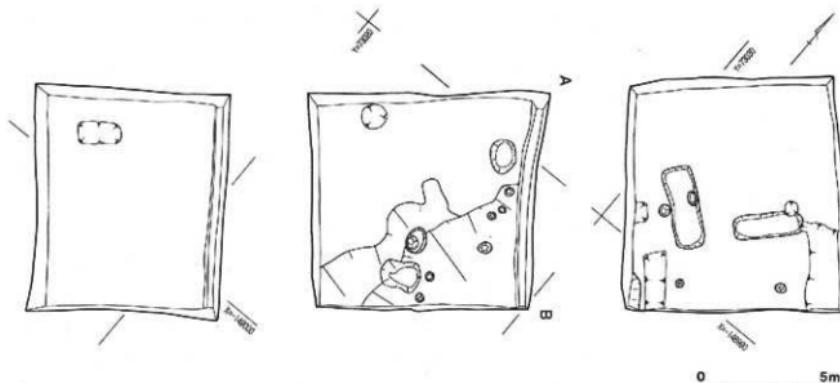
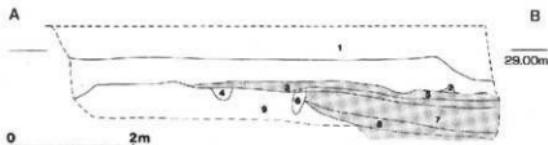


fig.321 調査区平面図



- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| 1. 稲土                  | 6. 深褐色シルト質粘土           |
| 2. 稲灰褐色砂質シルト           | 7. 黒灰色砂質シルト(古墳時代遺物包含層) |
| 3. 深褐色砂質シルト(遺物包含層)     | 8. 岩岡灰色砂質シルト           |
| 4. 灰褐色砂質シルト            | (弥生時代末～庄内期遺物包含層)       |
| 5. 黑褐色砂質シルト(古墳時代遺物包含層) | 9. 深茶色岩岡色粘土(地山部)       |

fig.322 調査区断面図

## 1. はじめに

新方遺跡は、伊川右岸の標高約12~15mの沖積地に立地する弥生時代前期から室町時代に至る複合遺跡である。東を潤和遺跡、北を今池尻遺跡と接する。海岸線からの直線距離は約3kmである。これまでに40回を越える発掘調査が実施され、さまざまな成果を収めている。

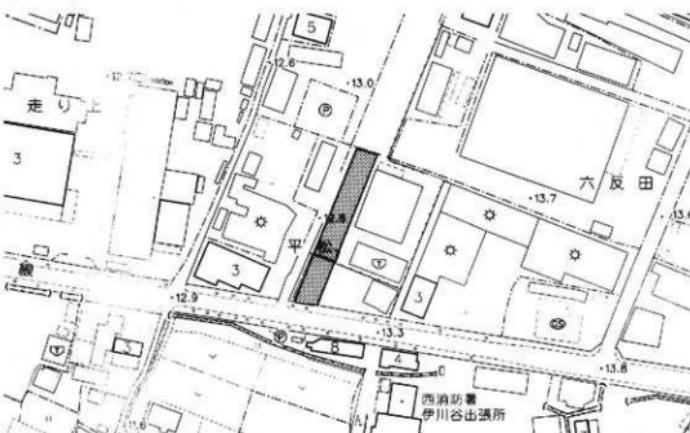


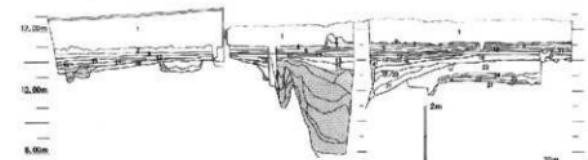
fig.323

調査位置図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

今回の調査では、弥生時代前期から室町時代前半に至るまで、時代が連続するものではないが、5時期にわたる遺構面が確認できた。特に、竪穴住居をはじめとする多くの遺構が確認できた弥生時代後期から古墳時代前期では遺構密度も高く、まとまった量の遺物が出土している。

なお調査の詳細については、平成14年度刊行の『今池尻遺跡 新方遺跡平松地点－発掘調査報告書－』を参照いただきたい。



- |                    |                   |                      |
|--------------------|-------------------|----------------------|
| 1 稲土               | 10 淡灰色シルト質埋細砂     | 19 乳白色質細砂質シルト        |
| 2 稲土               | 11 淡乳灰色シルト質埋細砂～細砂 | 20 淡乳灰色シルト質埋細砂       |
| 3 淡黄灰色シルト質細砂       | 12 淡黄色シルト質埋細砂     | 21 淡灰色シルト質埋細砂        |
| 4 黄灰色シルト質細砂        | 13 淡乳灰色シルト質埋細砂    | 22 淡褐色シルト質埋細砂        |
| 5 淡灰色シルト質細砂        | 14 淡乳灰色シルト質埋細砂    | 23 淡黄色シルト質埋細砂～       |
| 6 淡黃灰色シルト質細砂       | 15 灰色シルト質埋細砂      | 24 淡黃灰色シルト質埋細砂       |
| 7 淡黃灰色シルト質細砂～暗砂    | 16 明黃白色シルト質埋細砂    | 25 淡乳灰色シルト質埋細砂～明黄色細砂 |
| 8 黄白色シルト質埋細砂～乳灰色細砂 | 17 淡灰色シルト質埋細砂～細砂  | 26 黑色シルト             |
| 9 淡黃灰色シルト質埋細砂～細砂   | 18 淡褐色シルト質埋細砂～細砂  | 27 淡黄色細砂質シルト         |

fig.324

調査区西壁断面図

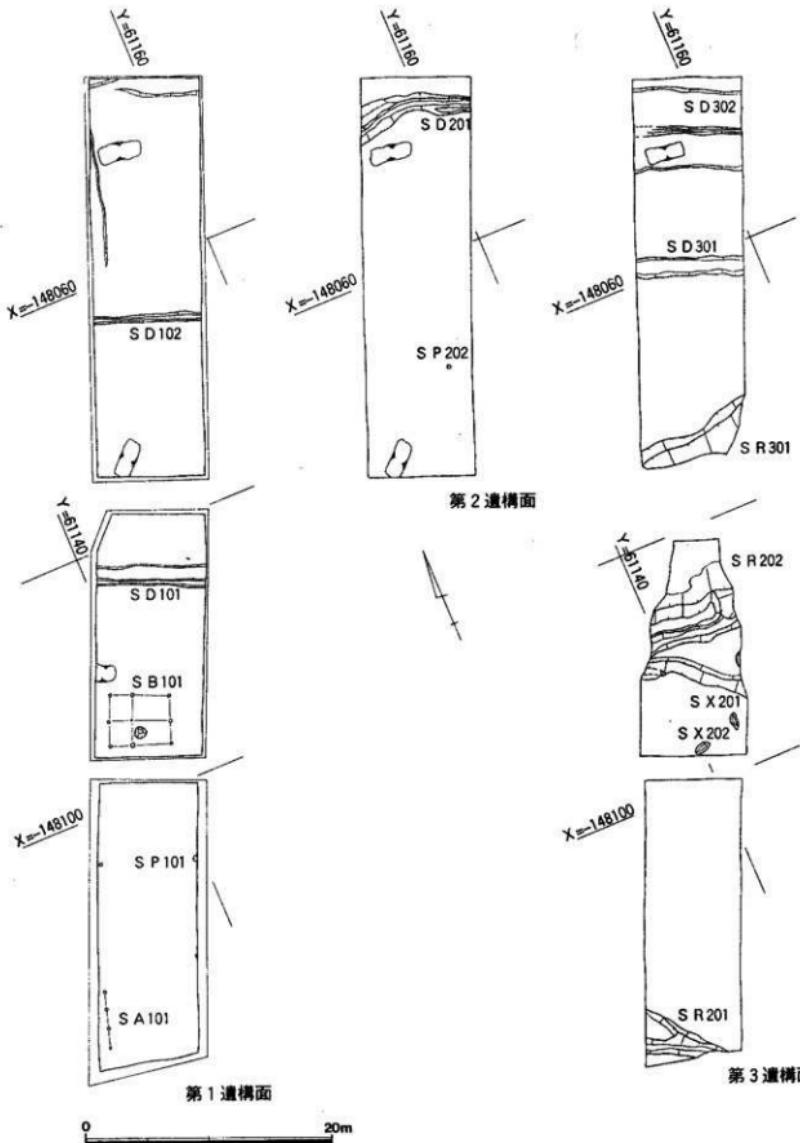
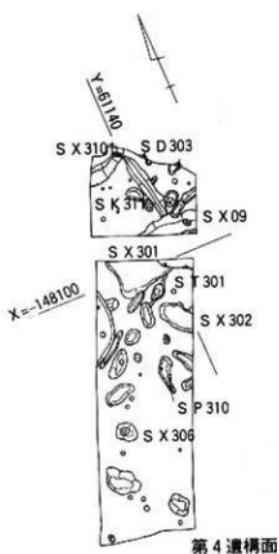
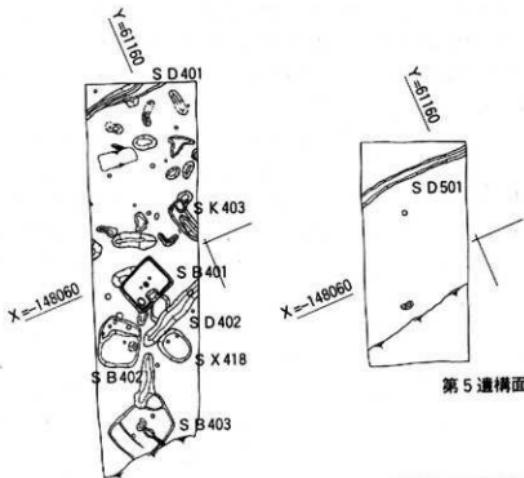


fig.325 第1～3達構面平面図



0 20m

fig.326 第4・5遺構面平面図



fig.327 III区第4遺構面全景

### 3.まとめ

まず、弥生時代前期では、新方遺跡の開始期に当たる前期初頭の遺物が確認されている。第44次調査地点II区の敷地の東端に当たる水路擁壁部分が前期初頭の遺構・遺物が確認された平松地点第1次調査地点に当たることも含めて考えると、さらに周辺にも遺構が拡がるものと推定できる。

弥生時代中期では、遺構・遺物がII区南半での北向きの傾斜面で確認できたのみで、その内容は判然としないものの、時期的には中期の前半段階に限定される。

弥生時代後期～古墳時代前期では、竪穴住居4棟をはじめ多くの遺構に恵まれ、多量の遺物が出土した。さらに、古墳時代前期の布留式併行期の竪穴住居の確認は、弥生時代末の庄内併行期には吉田南遺跡へと集落の中心が移動したとする想定を覆すもので、今後さらに両遺跡間での集落の動向が注目されるところである。また、山陰系の特徴をもつ壺の口縁部も出土しており、今後の検討課題のひとつとして挙げられる。

古墳時代後期では流路が確認されたのみで、集落域を直接物語る遺構には恵まれなかつた。流路S R 202が機能していたのは、平成13年度に実施した今池尻遺跡第3次調査S R 101とほぼ同時期と考えられ、伊川が大きく氾濫した時期と考えられる。また、最終埋没期には同じように竪穴住居が営まれた時期と重なり、当時の地形環境や土地利用を復元する上で、有効な資料と考えられる。

平安時代前期では平松地点第3次調査-II区で確認された遺構群に同一時期のものが含まれていることから、やはり調査地点の北東方向の上流域に当該期の集落が埋没しているものと想定できる。また、遺構の頻度が低かったことは、平松地点第3次調査-I区で水田面が確認されることとも対応し、プラント・オバール分析の結果からみても、水田域が形成され、集落域が形成されていなかったことを反映しているものと考えられる。

室町時代前半では、集落域と水田域が同時に確認できた。集落域とするには掘立柱建物や柵列が確認された程度で、遺構・遺物には恵まれない。散村的な建物配置をしていったのか、水田に伴う建物であったのであろうか。さらに、水田域の範囲は明確にはできないものの、新方遺跡平松地点第3次調査-II区までは拡がらないものと想定できる。



fig.328  
SB01出土遺物

## IV. 平成14年度の保存科学調査・作業の概要

遺跡より出土する遺物のうち、出土状態のまま保管しようとすると形状その他に変化を来たし、ひどい場合には崩壊に至るものがある。そのような遺物に対する保存科学的処置が不可欠となっている。また現場で遺物を取り上げる際、遺物が脆弱であるために特別な手法で取り上げ作業をおこなったり、遺構そのものや土層断面など、通常は移動の困難な資料を持ち帰る方法なども実施している。

### 遺物の保存科学

金属製品 平成12・13年度の御蔵遺跡の発掘調査では金銅製(51-2次)・青銅製塗塗(37-2次)の

御蔵遺跡 帯金具各1点が出土した。

37-2次・51次 金銅製帶金具は青銅地に金鍍金が施されており、鍍金層の表面は銅サビ、土砂等で覆われており、今回実施した保存科学的処置ではオリジナルな鍍金層を表出し、本来の金色の輝きに戻すことにした。またX線透過画像による構造調査において、約1mmの貫通孔が4箇所穿たれていることが判明し、錫帯裏金具であることが想定された。表面に付着した土砂はエタノールを使用し、刷毛・竹串によって洗浄した。銅サビはエタノール中に浸し、実体顕微鏡下で微細な部分を観察しながら、ハンディーな超音波研磨器を使用して遺物を傷つけないよう慎重に除去していった。帶金具内面には有機質を含んだ土砂が付着しており、除去せずに保存することとした。クリーニングを終えた遺物は、ベンゾトリアゾール2%エタノール溶液を最高約40cmHgで2時間減圧含浸し、サビを固定した。乾燥後、アクリル系合成樹脂(商品名:バラロイドBT2)の5%有機溶剤溶液を2回塗布し、強化した。



fig.329 金銅製帶金具出土状態 (表)



fig.330 同 左 (裏)

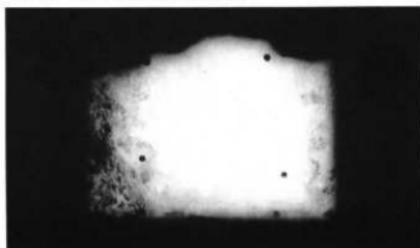


fig.331 同 上 X線透過画像



fig.332 同 左 保存処理完了後

一方漆塗の革具は鉢具であり、2枚あわせの銅版を鉢留めし、黒漆で仕上げられている。こちらは出土時すでに2枚の銅版が遊離していたため、内部観察が可能であった。内部には有機質の集合体が充填されており、実体顕微鏡で拡大してみたところ、有機質の殆どが粉殻であることが判明した。革帶の内部にクッション材として充填されていたもの、鉢具で革帶を挟み込む際の空隙を埋める緩衝材などの機能が想定されるが、実際の用途は不明である。こちらは土砂のみをエタノールで洗浄し、同上の防錆処理と樹脂強化を施して保管している。

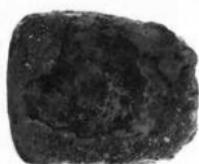


fig.333 銅製鉢具出土状態

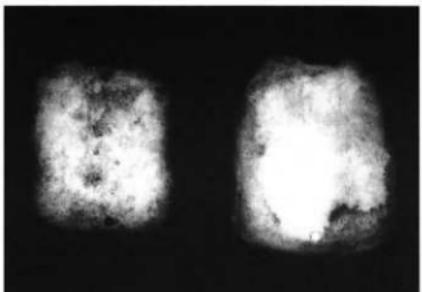


fig.334 同 左 X線透過画像



fig.335 同 上 内部



fig.336 同 左 マクロ写真 (4倍)



fig.337 有機質顕微鏡写真 (8倍)

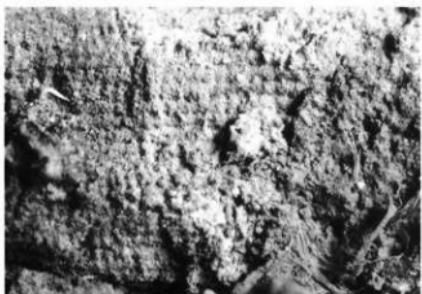


fig.338 同 左 (35倍)

**出口遺跡 6 次** 平成14年度の出口遺跡の発掘調査では、鎌倉時代の木棺墓から青磁碗、土師器小皿と共に刀子、鉄釘といった金属製品が出土しており、同年度に保存科学的処置を実施した。

刀子については表面観察の段階で鞘木質がサビ化して残存していることが確認でき、これを除去せずにクリーニングすることにした。木質を一部サンプリングして薄片資料を作成し使用樹種の同定を試みたが、木材組織が残存するのはごく表層のみであり、柾目の観察が困難であったため、樹脂道のない針葉樹であることのみが判明した。

クリーニングはX線透過像で内部構造を観察しながら精密グラインダーでサビを除去していった。その後、水酸化リチウムのアルコール溶液中に約3ヶ月間の脱塩処理を施し、減圧装置内（約60cmHgで3時間）でアクリル系合成樹脂を含浸、強化した。



fig.339 刀子出土状態

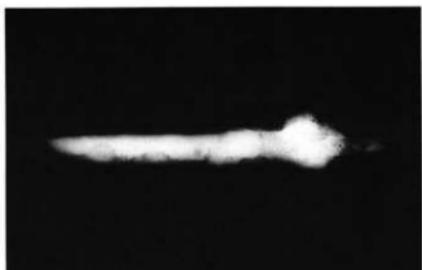


fig.340 同 左 X線透過画像



fig.341 保存処理完了後



fig.342 鞘木質残存マクロ写真 (2倍)



fig.343 木質プレバート作成作業



fig.344 同 左 (木口, 25倍)



fig.345 同 左 (板目, 60倍)

## 木製品

森南遺跡1次 森南遺跡では水田に伴うと考えられる溝と導水施設が検出された。これには護岸と導水を目的としたであろう木杭列と板材が出土したが、脆弱化し、手で取り上げることが困難と目されたものについて、発泡ウレタンフォームを用いた取り上げ作業を実施した。

取り上げ対象としたのは幅約30cm、長さ約130cm、厚さ1～3cmのヒノキ製の板材で、劣化し薄くなった部分は取り上げ時に折損する恐れがあった。まずは乾燥による形態変化を最小限にするため、十分に水を含ませた紙製ワイパーを遺物表面に貼り付けていき、その上を遺物保護のためのアルミ箔で被覆した。さらに周囲に角材を用いて補強枠を作製した。そして発泡ウレタンフォームにより梱包するが、今回はスプレー式のウレタンフォームを吹き付けて梱包した。さらに遺物下部の土層にトンネルを掘削し、その中にもウレタンフォームを充填して地面と切り離し、取り上げ、埋蔵文化財センターに搬入した。センターでは開梱・水洗洗浄した後、写真撮影と実測図を作成し、ビニールチューブにパックして仮保管している。



fig.346 板材出土状況



fig.347 発泡ウレタンフォーム梱包



fig.348 開梱作業



fig.349 開梱後水洗作業

**深江北町遺跡** 平成12年度に発掘調査が行われた深江北町遺跡では、総点数459の木製品が出土しているが、一部木簡等を除いて殆どが水漬け状態で仮保管されていたため、平成14年度に保存処置をおこなった。出土後、ビニールチューブもしくはコンテナに仮収納されていた木製品は再度水洗し、ラミネート加工したIDラベルとともに、パンチング加工したビニールチューブに入れ、PEG含浸槽中で含浸処理をおこなった。用いた樹脂はポリエチレンリコール（PEG #4000）で、開始時を20%とし、徐々に濃度を上げ、およそ60%まで約5ヶ月かけて含浸させた。その後真空凍結乾燥機を用いて平均約3週間かけて順次乾燥処理し、恒温恒湿（23℃・55%RH）の特別収蔵庫に収納保管した。



fig.350  
PEG含浸作業



fig.351  
真空凍結乾燥



fig.352  
保存処理完了後

遺跡名	主な出土遺物	点数
岡本梅林古墳1次	鉄刀、鉄釘	65
住吉宮町遺跡37次	鉄鏃、鉛滓	2
出口遺跡6次	鉄刀、鉄釘	14
小路大町遺跡4次	鉛滓	1
西岡本遺跡2次	鉄製品	1
西求女塚古墳13次	鉄釘	2
雲井遺跡14次	鉄釘	8
二宮遺跡2次	銅錢、鉄釘	10
上沢遺跡49-1次	鉄釘	5
上沢遺跡49-3次	銅錢、鉄釘	6
上沢遺跡50次	鉄釘	1
上沢遺跡	鉄釘、鉛滓	12
兵庫松本遺跡12-1次	鉛滓	1
兵庫松本遺跡12-3次	鉛滓	1
兵庫松本遺跡12-4次	鉄製品	1
兵庫松本遺跡	鉛滓	2
兵庫津遺跡28次	鉄釘	4
兵庫津遺跡29次	銅容器、銅錢、煙管	16
御藏遺跡50-9次	鉄製品	1
御藏遺跡50-10次	鉛滓	1
御藏遺跡51次	金環、鉄釘	9
御藏遺跡51-2次	金綱装帯金具、鉄釘	3
水笠遺跡22次	鉄製品	1
長田神社境内遺跡	鉄製品	3
東尻池遺跡1次	鉄釘	3
三葉町遺跡16-1次	鉄釘	1
三葉町遺跡16-2次	銅製品、鉄釘、鉛滓	8
三葉町遺跡16-3次	銅製品、鉄釘	5
戎町遺跡38-2次	鉛滓	1
戎町遺跡38-4次	鉄釘	1
戎町遺跡38-8次	鉄釘	1
戎町遺跡41-1次	鉛滓	1
戎町遺跡43次	鉄製品	1
大手町遺跡7次	鉄製品	1
舞子占墳群19次 B	鉄製馬只、鉄刀、鉄鏃	77
新方遺跡44次	銅錢	1
水谷遺跡9次	鉛滓	1
端谷城跡2次	銅錢	1
端谷城跡3次	銅錢、鉄釘	4

計277

表1. 平成14年度出土金属製品

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
小路大町遺跡	4	馬具、建築材	70
本庄町遺跡	9	加工材	16
森南町遺跡	1	板材、杭	102
野瀬北遺跡	1	漆椀、柱材	10
上沢遺跡	48	曲物、板材	9
上沢遺跡	49-2	柱材	1
兵庫津遺跡	29		1
兵庫津遺跡	31	漆椀、下駄、杓文字	117
御藏遺跡	49		3
御藏遺跡	51-2	壺串、柱材	39
二葉町遺跡	16-3	木製品	126
長田神社境内遺跡		杭	1
松野遺跡	34-2	礎板	1
新方遺跡	44	板材、鐵	6

表2. 平成14年度出土木製品

遺跡名	樹種	花粉	種実	珪藻	細胞壁	材質
本庄町遺跡9次	52点	9点	12点			2点(無)
小路大町遺跡4次	132点		5点	10点	13点	
御藏遺跡45次	14点	7点	13点			9点
御藏遺跡51-2次	47点		86点			
二葉町遺跡16次		6点			6点	
新方遺跡平松地點3次	19点					
新方遺跡44次	33点	12点			4点	
今池尻遺跡2次	28点					
今池尻遺跡3次	16点					
二葉町遺跡16次		6点			6点	

表3. 平成14年度自然科學分析委託

## 平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成17年3月 印刷

平成17年3月 発行

発 行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078(322)5799

印 刷 伊アロ工印刷

神戸市中央区古湊通1丁目15-301号

TEL 078(371)3831

神戸市広報印刷物登録・平成16年度 第279号（広報印刷物規格 A-6類）



本書は、再生紙を使用しています。